

特 71

754

参考叢書

國

文

典

全

東京

文

武

堂

三石 賤夫 著

253  
1

301337-001-4

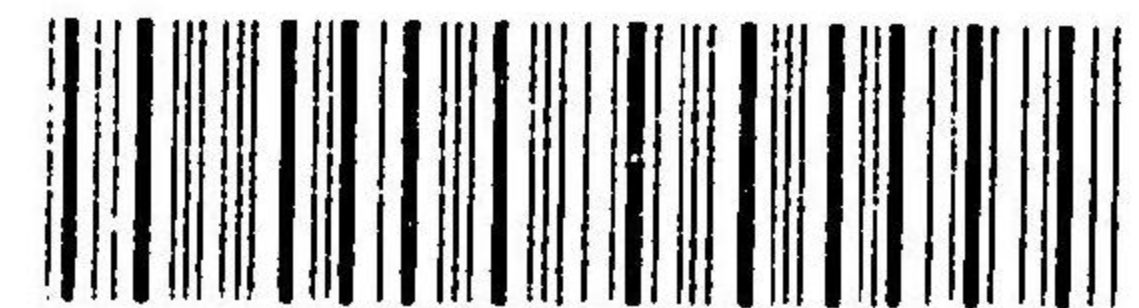
特71-754

国文典

三石 賤夫 著

M38

DAC-0001





參叢考書

特 71

754

三石賤夫著

國文典

東京

文武堂發行

全

253

1



學士叢書

哲學館  
大學講師  
三石賤夫著

國

文

典

東京

文武堂

發行

明治

38 12 18

丙午

特71  
754

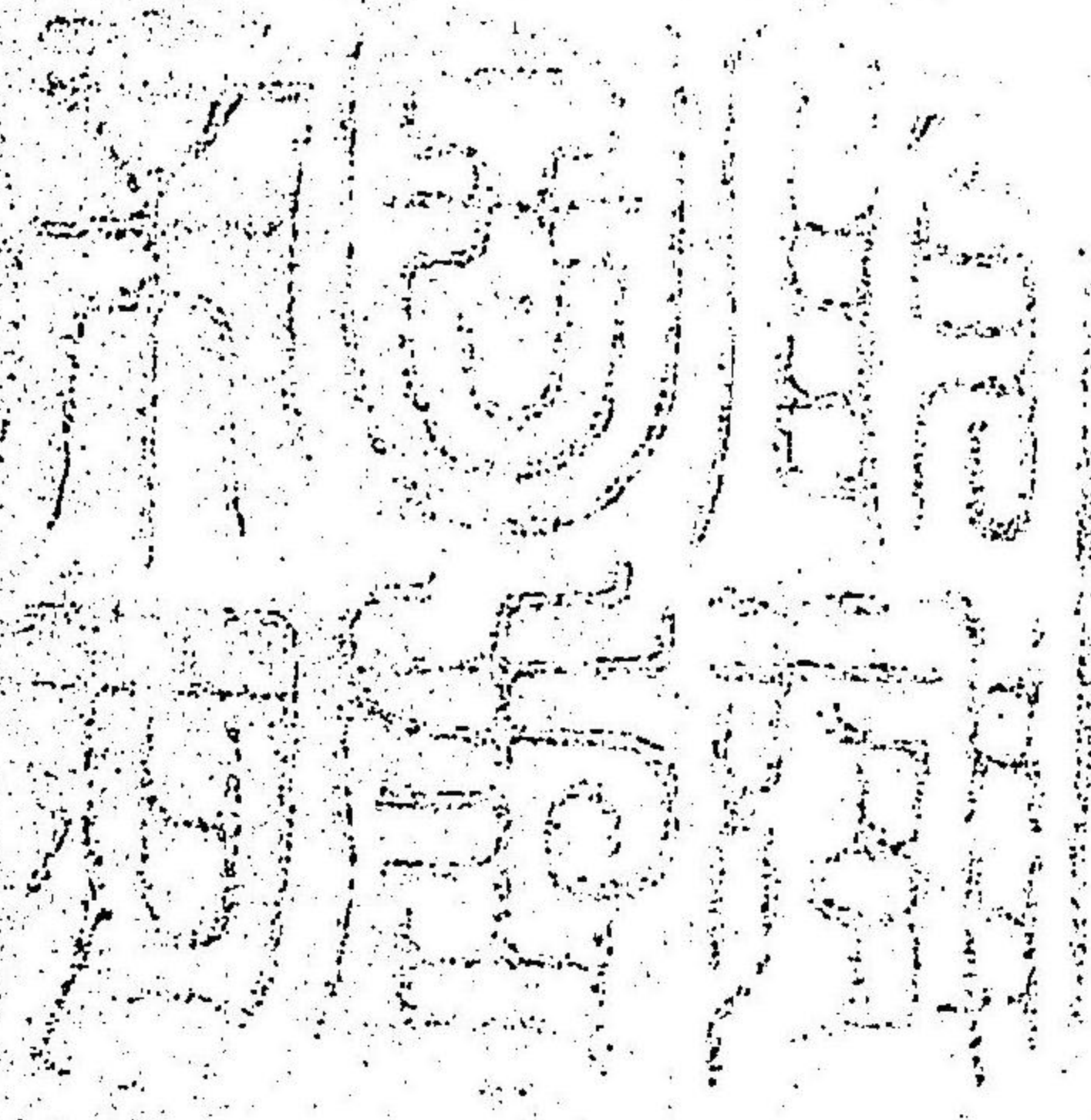
きはしがき

はしがき

凡そ國文典中、稍々複雑にして初學者に解しがたきは、各動詞の活用、動詞助動詞の連續法及び助動詞相互の連續法なり。故に曩に初學者の參考に供せんと欲し、動詞助動詞連續表と動詞一覽とを編み文典の兼と題して明治三十五年冬、之を刊行せり。卷尾のもの即ち是なり。今又之に文典一般を加へて、出版せり。

明治三十八年九月

著者記す



國文典

哲學館大學講師 三石 賤 夫 著

第一章 名詞

一 歴史上の分類 本邦在來のもの、外國より傳來せしものとあり。

本邦在來のもの  
あり つちの はな つほみ こころ ところ 等  
仁義 忠孝 聖人 便利 勝敗 炎熱 清潔  
山岳 江海 樹木 菓實 重疊 等  
佛陀 般若 涅槃 菩薩 須彌山 等  
カスガ 一般 ラス ランブ ホンブ シヤホン ソーダ ビール  
トニチル ビン ベン ビストル インキ 等 (歐洲語)

外國傳來のもの  
カスガ 一般 ラス ランブ ホンブ シヤホン ソーダ ビール  
トニチル ビン ベン ビストル インキ 等 (歐洲語)

二 成立上の分類 本來名詞と、他語より轉じたるものとあり。

本來名詞

おめ つかいへ はしら かべ たよみ つくろ すどり  
ひと からだ かみ かほ め はな くら 等

轉成名詞

疑ひ 迷ひ 悟り 思ひ 晴れ 曇り 戦ひ 争ひ  
勝ち 負け 貸し 借り 預り 勤め 教へ 等

三 組成上の分類

單一名詞

以上列擧したるものは、皆之に屬す。

月日 山寺 山川 月夜 野原 人心 火鉢 箱火鉢

秋風 春風 北風 南風 西風 東風 (名詞と名詞)

遠路 近日 青山 黒髪 赤裸 太竿 細筆 長火鉢

古物 短夜 寒空 荒物 重荷 輕業 (形容詞と名詞)

生物 水香 枯草 木枯 食物 貸家 借家 春着

晝寝 年寄 棒讀 塵取 庭掃 堂守 (名詞と動詞)

長生 早書 高笑 長居 厚着 晩時 長持 黒塗

合成名詞

(形容詞と動詞)

書取

(動詞と動詞)

四 性質上の分類一

普通名詞と、固有名詞となるなり。

普通名詞

山 川 海 湖 水 動物 植物 人 猿  
花 松 杉 梅 机 杖 硯 紙

固有名詞

東京 北京 倫敦 武藏 富士山 利根川 瀨名湖  
道真 正成 秀吉 家康 釋迦 孔丘 韓信 諸葛亮

五 性質上の分類二

普通と固有との別を立つる必要あるがため、有形名詞と無形名詞に分つ。即ち有形名詞は、右の固有名詞普通名詞に分たるべきものなれど、無形名詞は、此區分を附すべからざればなり。

有形名詞 右の普通名詞、固有名詞に擧げたるものと同じ。

無形名詞 善良 慈善 音響 告訴 判断 道理 交際 等

### 第二章 代名詞

#### 一 人代名詞

自稱

〔野生〕

己拙者

私

自分

身共

某

小生

迂生

對稱

なむぢ

御身

其許

足下

閣下

貴君

貴殿

他稱

かれ

あれ

かやつ

あやつ

不定稱

たれ

#### 二 指示代名詞

近稱

中稱

遠稱

不定稱

事物

こ

これ

そ

それ

あか

あかれ

なに

いづれ

地位

こ

ここ

そ

そこ

あか

あかしこ

いづこ

いづく

方向

こなた

こち

そなた

そち

あなた

あなた

いづかた

いづら

### 第三章 數詞

#### 一 數詞

事物を數ふるに用ゐる語にして、文章上の位置は、名詞に同じ。

ひとつ

ふたつ

みつ

よつ

いつ

むつ

ななつ

やつ

このつ

とを

はたち

みそぢ

よそぢ

いつそぢ

むそぢ

ななそぢ

やそぢ

このそぢ

もゝいほ

いほ

やほ

ち

よろづ

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

百

千

萬

億

#### 二 事物の數へ方

其事物によりて、其下に接尾語を添ふることあり。

劔一振

刀二腰

神三柱

鎗四筋

盃五組

弓六張

家七棟

旗八流

着物九重

長持十竿

菓子一折

藏二月前

### 第四章 動詞

菓	一個	紙	二枚	手紙	三通	書翰	四封	掛物	五幅
本	六冊	筆	七本	家	八戸(軒)	委員	九名	書籍	十部
硯	一面	詩	二首	小刀	三挺	俳諧	四句	屏風	五雙
文	六篇	船	七艘	大砲	八門	馬車	九臺	人足	十人
車	一輛	酒	二杯						

#### 一 動詞の分類

本來の動詞  
 咲く 開く 勝つ 學ぶ 有り 示す  
 離る 兼ね 耐ふ 老ゆ 死ぬ 等  
 轉成の動詞  
 ものす 罪す 和す 信ず 論ず 散ず  
 啓發す 成就す 扶翼す 持す 顯彰す 等

#### 二 語根と語尾

動詞と形容詞とは、語尾の變化するものなり。即ち

戸をひらかむ 戸をひらきて 戸をひらく 戸をひらけども  
 と四様に變化す。この變化する部分を語尾といひ、變化せざる部分を語根又は語  
 幹といふ。右の例にては、語根「ひら」語尾「かきくけ」なり

語根 語尾

ひら  
 かむ きて けども

語根 語尾

まな  
 びむ びて べども

語根 語尾

さづ  
 けむ くる くれども 時

#### 三 動詞活用の説明

字を 書かむ  
 字を 書きて  
 字を 書く

戸を ひらかむ  
 戸を ひらきて  
 戸を ひらく

終止 連用 將然



字を 書く 人あり  
 字を 書け どもならず  
 字を 書け 戸を ひらく 者あり  
 戸を 書け 戸を ひらけ ども見えず  
 戸を 書け 戸を ひらけ 命 既 然 連 體

右の如く、未來のむを添へて、之を將然とし、連續の語てを添へて、之を連用とす。終止にて文章の「たび終るものなり。書く人、ひらく者等の如く、下に名詞のつく處を連體とす。既然とは、將然に對して言ひたるにて、この段にて言ひあらはせば、事の既に定りたるをいふなり。命令は文字の示せるにて知らるべし。

四 動詞語尾活用表

語根を片假名にて、語尾を平假名にて示す

例		將然	連用	終止	連體	既然	命令
加行	書く	カカ	カキ	カク	カク	カケ	カケ
佐行	推す	オサ	オシ	オス	オス	オセ	オセ
多行	打つ	ウタ	ウチ	ウツ	ウツ	ウテ	ウテ
波行	逢ふ	アハ	アヒ	アフ	アフ	アヘ	アヘ

四段活用

麻行	住む	スマ	スミ	スム	スム	スメ	スメ
良行	釣る	ツラ	ツリ	ツル	ツル	ツレ	ツレ

用上二段活

加行	起く	オキ	オキ	オク	オク	オくれ	オきよ
多行	落つ	オチ	オチ	オツ	オツ	オつれ	オちよ
波行	強ふ	シヒ	シヒ	シフ	シフ	シふれ	シひよ
麻行	恨む	ウラミ	ウラミ	ウラム	ウラム	ウらむれ	ウらみよ
也行	悔ゆ	クイ	クイ	クゆ	クゆる	クゆれ	クいよ
良行	懲る	コリ	コリ	コル	コる	コるれ	コりよ

將然 連用 終止 連體 既然 命令

阿行	得	エ	エ	ウ	ウ	うれ	えよ
加行	受く	ウケ	ウケ	ウク	ウくる	ウくれ	ウけよ
佐行	瘦す	ヤセ	ヤセ	ヤス	ヤする	ヤすれ	ヤせよ

用下二段活

多行	捨つ	ステ	ステ	スつ	スつる	スつれ	ステよ
奈行	兼ねぬ	カレ	カレ	カぬ	カぬる	カぬれ	カレよ
波行	添ふ	ソヘ	ソヘ	ソふ	ソふる	ソふれ	ソヘよ
麻行	響む	ホメ	ホメ	ホむ	ホむる	ホむれ	ホメよ
也行	消ゆ	キエ	キエ	キゆ	キゆる	キゆれ	キエよ
良行	枯る	カレ	カレ	カる	カるる	カるれ	カレよ
和行	植う	ウゑ	ウゑ	ウう	ウうる	ウうれ	ウゑよ

用上一段活

阿行	射る	イ	イ	イる	イる	イれ	イよ
加行	着る	キ	キ	キる	キる	キれ	キよ
奈行	似る	ニ	ニ	ニる	ニる	ニれ	ニよ
波行	干る	ヒ	ヒ	ヒる	ヒる	ヒれ	ヒよ
麻行	見る	ミ	ミ	ミる	ミる	ミれ	ミよ
和行	居る	ヰ	ヰ	ヰる	ヰる	ヰれ	ヰよ

將然

連用

終止

連體

既然

命令

用下二段活

加行	蹴る	ケ	ケ	ケる	ケる	ケれ	ケよ
----	----	---	---	----	----	----	----

將然 連用 終止 連體 既然 命令

變格活用

加行	來 <sup>ク</sup>	コ	キ	ク	くる	くれ	こよ
佐行	爲 <sup>ス</sup>	セ	シ	ス	する	すれ	せよ
奈行	往 <sup>イ</sup> ぬ	イナ	イニ	イぬ	イぬる	イぬれ	イれ
良行	有 <sup>リ</sup>	アリ	アリ	アリ	アる	アレ	アレ

五 動詞語尾活用上の注意

動詞語尾の何段活用なるかを知らむには、先づ第一に、其動詞の語尾に「む」と「ず」とのつく處を索めて、之を將然とすべし。次に「て」をつけて、連用と定むべし。斯くすれば大抵その段を定むることを得。然れども平素川の誤れるものと、發音同じくして、行の異なるものとは、一々記臆せざるべからず。

7 6 5 4

經 <sup>フ</sup>	違 <sup>チ</sup>	添 <sup>カ</sup>	叶 <sup>フ</sup>	敢 <sup>フ</sup>	波行下二段	老 <sup>ウ</sup>	也行上二段	生 <sup>オ</sup>	波行上二段	居 <sup>キ</sup>	和行上二段	射 <sup>ル</sup>
紛 <sup>マ</sup>	事 <sup>シ</sup>	揃 <sup>フ</sup>	構 <sup>フ</sup>	與 <sup>フ</sup>	波行下二段	悔 <sup>ウ</sup>	也行上二段	強 <sup>フ</sup>	波行上二段	率 <sup>キ</sup>	和行上二段	鑄 <sup>ル</sup>
交 <sup>マ</sup>	傳 <sup>フ</sup>	堪 <sup>フ</sup>	考 <sup>フ</sup>	誂 <sup>フ</sup>	に活くもの	報 <sup>ウ</sup>	に活くもの	戀 <sup>フ</sup>	に活くもの	用 <sup>ル</sup>	に活くもの	
迎 <sup>ム</sup>	集 <sup>ツ</sup>	違 <sup>カ</sup>	加 <sup>フ</sup>	訴 <sup>フ</sup>								
辨 <sup>フ</sup>	調 <sup>フ</sup>	貯 <sup>フ</sup>	拵 <sup>フ</sup>	憂 <sup>フ</sup>								
終 <sup>フ</sup>	唱 <sup>フ</sup>	湛 <sup>タ</sup>	答 <sup>フ</sup>	押 <sup>オ</sup>								
教 <sup>フ</sup>	捕 <sup>フ</sup>	稱 <sup>タ</sup>	支 <sup>フ</sup>	襄 <sup>フ</sup>								
	活 <sup>ナ</sup>	携 <sup>ラ</sup>	從 <sup>フ</sup>	替 <sup>フ</sup>								
	控 <sup>フ</sup>	譬 <sup>フ</sup>	備 <sup>フ</sup>	算 <sup>フ</sup>								

1 平素用ゐる誤れるもの

任<sup>マ</sup>せむ 任せて 任す 任する 任すれ と佐行下二段に活用すべき者を  
 任さむ 任して 任す 任せ と佐行四段に活用せしむること  
 射む 射て 射る 射れ と阿行上二段に活用すべきものを  
 射らむ 射りて 射る 射れ と良行四段に活用せしむること  
 蹴む 蹴て 蹴る 蹴れ と加行下二段に活用すべきものを  
 蹴らむ 蹴りて 蹴る 蹴れ と良行四段に活用せしむること  
 右の類は多からず、且斯く用ゐる居る土地も廣からず。

2 同じ發音にて、行の異なるもの

阿行上二段と 和行上二段  
 波行上二段と 也行上二段  
 波行下二段と 也行下二段と 和行下二段  
 阿行上二段と 和行上二段  
 波行上二段と 也行上二段  
 波行下二段と 也行下二段と 和行下二段  
 阿行上二段と 和行上二段  
 波行上二段と 也行上二段  
 波行下二段と 也行下二段と 和行下二段  
 阿行上二段と 和行上二段  
 波行上二段と 也行上二段  
 波行下二段と 也行下二段と 和行下二段

8 也行下二段

に活くもの

愈ゆ

覺ゆ

消ゆ

越ゆ

肥ゆ

凍ゆ

冴ゆ

榮ゆ

盛ゆ

9 和行下二段

に活くもの

絶ゆ

生ゆ

冷ゆ

殖ゆ

吼ゆ

見ゆ

燃ゆ

萌ゆ

10 佐行變格に

活く動詞は

す

おはす

の二語のみなれど、名詞、漢語及び形容詞を動詞に使用するものは、皆この佐行變格を用ゐるなり

出發す

激戦す

監督す

教授す

卒業す

入學す

啓發す

論ず

和す

任ず

投ず

信ず

講ず

獻ず

罪す

欲す

ものす

重んず

輕んず

安んず

疎んず

甘んず

良行變格に活く動詞は

有り

居り

侍り

の四語あるのみ

六 動詞の自動他動

自ら退かむ 四段活用

自ら退きて

自動 自ら退く

自ら退くこと能はず

自ら退けども

自ら退け

玉砕けむ 下二段活用

玉砕けて

自動 玉砕く

敵を追ひ退けむ 下二段活用

敵を追ひ退けて

他動 敵を追ひ退く

敵を追ひ退くることを得たり

敵を追ひ退くれども

敵を追ひ退けよ

玉を砕かむ 四段活用

玉を砕きて

他動 玉を砕く

玉を砕くことあり  
玉を砕くれども  
玉を砕けよ

玉を砕くことあり  
玉を砕けども  
玉を砕け

自動

他動

車に乗りて行く  
板水面に浮びて流る  
本破れて文字明ならず  
大阪亡びて江戸興る  
木枯れて葉落す  
花散りて泥となる  
彈丸的に申りて的砕けたり  
着物干す  
着物乾く

荷物車に乗せて送る  
舟を河に浮べて遊ぶ  
本を破りて捨つ  
大阪を亡して江戸を興す  
木を枯らして葉を落す  
花を散らして泥となす  
彈丸的に申りて的を砕けたり  
着物を干す  
着物を乾かす

良行四段

波行四段

良行下二段

佐行下二段

波行下二段

良行四段

七 動詞の名詞となるもの

動詞は連用にて、名詞となるなり。

某死ぬ	續かむ(加四)	入らむ(良四)	整はむ(波四)	焼けむ(加下二)
自動	續けむ(加下二)	入れむ(良下二)	整へむ(波下二)	焼かむ(加四)
他動	見む(麻上一)	治らむ(良四)	残らむ(良四)	離れむ(良下二)
自動	見えむ(也下二)	治めむ(麻下二)	残さむ(佐四)	離さむ(佐四)
他動				

動詞は連用にて、名詞となるなり。	曇り	晴れ	答へ	教へ	使ひ	習ひ	行ひ
喜び	助け	押し	押へ	押し	疲れ	戦ひ	拂ひ
自動他動によりて、名詞となるにも、亦異なり	暮れ方	日暮し	晴れ模様	見晴し			
入り替り	入れ替へ	下り龍	枯れ木	古枯し			
山續き	續け書き						

大入り	水入れ	倒れ家	將基倒し
破れ袴	牢破り	大當り	當て物
落ち武者	落し物	うつりかほり	うつし畫
切れ味	紙切り	焼け残り	焼き物
賣れ口	賣り物	休み日	氣休め
立ち居	衝立て	あがり高	あげ物
親がより	掛け物	南向き	向け方

### 第五章 助動詞

一 説明 助動詞は、動詞の下に連續して、其意義を完うせしむるものなり。名詞の下に連續するものもあり。

之を使役、所動、未來、過去、指定、打消、推量、對比、感嘆に分つ。

### 二 使役の助動詞

1	本を	しめ	むず	將然
	讀ま	しめて		連用
	しむ			終止
	しむる(名詞)			連體
	しむれ	ども		已然
	しめよ			命令
2	本を	せむ	ず	將然
	讀ま	せて		連用
	する(名詞)			終止
	すれ	ども		連體
	せよ			已然
3	早く	させ	むず	將然
	起さ	せて		連用
	さす			終止
	さする(名詞)			連體
	さすれ	ども		已然
	させよ			命令

第一は凡ての動詞の將然に連續し、二は四段奈變良變の將然に連續し、三は上一段下一段上二段下二段加變佐變の將然に連續するものなり。

(注意)この使役の助動詞の誤りを生ずるは、左の諸語なり。

得しむ とすべきを得せしむ と誤ること

任せさす とすべきを任せさす と誤ること

勉強せさす とすべきを勉強せさす と誤ること

### 三 所動の助動詞

1

人に	れ	む	ず
推さ	る	れ	ども
	る	れ	ども

(名詞)

2

人に	ら	れ	む	ず
譽め	ら	れ	たり	
	ら	る	る	(名詞)
	ら	れ	ども	
	ら	れ	ども	

右の一は動詞の四段奈變良變の將然に連續し、二は上二段下二段上一段下一段加變佐變の將然に連續するものなり。

(注意)所動の助動詞の誤り易きは左の如し。

人に信任せらる といふべきを人に信任さる と誤ることあり

こは佐變の動詞なれば、將然即ちせに所動の助動詞第二のらるの添はるべきものなり。

捕縛されたり 出發されたり は誤りなり

任されたり の如く、下二段活用の動詞にて誤ることもあり

○使役の助動詞と所動の助動詞との連續

使役の助動詞に所動の助動詞を添へて、用ゐることあり。

甲、乙に講釋をきかす をうけて 乙、甲に講釋をきかせらる

教師、生徒に文を作らしむ をうけて 生徒、教師に文を作らしめらる

助動詞と助動詞との連續法は、動詞に連續すると同じ。故に動詞の下二段と同じ助動詞には、亦下二段に連續する助動詞の連續するものなり。使役の助動詞は、三者共に下二段と同じ、故に所動のらる之に連續す

聽かしめ 將然  
 られ られ  
 られ て む  
 らる』  
 らるる(名)  
 らるれ

聽かせ 將然  
 られ られ  
 らる  
 らるる  
 らるれ

受けさせ 將然  
 られ られ  
 らる  
 らるる  
 らるれ

### 四 可能の助動詞

可能とは、爲し得ることをいふ。

深けれども渉らる

峻しくとも登られむ

右の「渉らる」は渉ることを得の意、「登られむ」は、登ることを得むの意なり。斯るものを可能の助動詞とはいふなり。

此助動詞は、所動の助動詞と異ならず。

此可能の一轉して左の如くなるものあり。

行末のみ案ぜられて

斯く考へらる

昔をしのばれて

こは心に自然に起りて、押へられぬ意なり。故に右の如く精神の働きをあらはす言葉に限るなり。

### 五 崇敬の助動詞

凡そ各動詞の動作の尊敬の意をあらはさむには、所動の助動詞を添へて其意をあらはすものなり。

父も喜ばれて

先生は歸られたり

といふは、單に「喜びて」「歸りたり」といふよりも、僅ながら、尊敬の意をあらはしたるものなり。

又使役の助動詞を添へて尊敬の意をあらはすことあり

御覽せさせ給ふ

臨御せしめ給ふ

渡らせ給ふ

右の如く使役の助動詞を以て尊敬の意をあらはすは、凡て上つ方には、些細の事まで皆下々に命じてせしむるにより、自ら爲し給ふ事までも、人に命じてせしむとすれば、尊敬となるなり。



(注意)所動の助動詞は、可能にも崇敬にも用ゐらるゝにより、紛れ易し。繙讀の際には注意すべき事なり。

### 六 未來の助動詞

未來の助動詞はたゞ一にて左の如し

行かむ 終止  
連體  
既 然  
明日京都に行かむ  
京都に行かむ者は金閣寺を觀るべし  
明日こそ京都に行かめ

この助動詞は、一切の動詞の將然に連續するものなり。

### 七 過去の助動詞

過去の助動詞にはりつぬたりけりきあり

1 り  
將然  
行けらば  
四段 行け  
連用  
なれりけり  
終止  
昨日行けり  
連體  
勉強せる人あり  
既 然  
家居しければ物思もなし  
佐變 せ  
れ

この助動詞は、四段活用の既然と佐變の將然とに連續するものなり。  
(注意)かく四段と佐變とに連續するものなるに、誤りて左の如く下二段の動詞に連續せしむること少からず

業を卒へり 事を任せり 家系絶えり  
旗を立てり 兵を進めり 敵を退けり  
右は皆誤なり。

2 つ 動詞の連用に連續するものなり。

將然 未來のむめのつきててむてめとなり、推量の意となる  
連用 行きてけり 別れてき  
終止 つ』  
連體 つる 鳴きつる方をながむれば云々  
既 然 つれ 行きつれば  
希望 てよ 君わたりなば舵かくしてよ(土佐日記)

3

ぬ 動詞の連用に連続し、たゞ奈變には連続せず。

將然 な 行きなば 見なば 未來のむめのつきてなむなめとなる、推量の意

連用 に 行きにけり 行きにたり 落ちにき

終止 ぬ

連體 ぬる 去りぬる五月

既然 ぬれ 明けぬれは

希望 ぬれ 行きぬ 推しぬ

4 たり 一切の動詞の連用に連続するものなり。

將然 たら 未來のむをつけて、過去の推量をあらはす。昨日行きたらむ

連用 たり 行きたりけり 行きたりき

終止 たり

連體 たる 行きたる日

既然 たれ 行きたれども 行きたれば

5 けり 動詞の連用に連続するものなり。

將然 けら 行きけらずや

連用 けり 推しけりき

終止 けり 昨日行きけり 行きたりけり 行きてけり 行きにけり

連體 ける 行きける時

既然 けれ 行きければ

けりは、時の意なくして、單に事を述ぶるに用ゐらるゝことあり

都ぞ春の錦なりける 古り行くものは我身なりけり

うきに堪へぬは涙なりけり

6 き 動詞の連用に連続す。但し加變と佐變とには別に連續法あり。

終止 き 示しき 示したりき

連體 し 示しし時

既然 しか 示ししかば

此きししかの加變佐變に連續するは左の如し。

加變

將然

こし ○  
こきとは續かず  
こし方行く末  
連用  
しか しかども

連用

きし ○  
ききとは續かず  
きし方行く末  
連用  
しか しかども

佐變

將然

せし ○  
せきとは續かず  
せし人  
連用  
しか 勉強せしかば

連用

し ○  
勉強し ○  
しとは續かず  
ししかども

(注意)此助動詞は、佐行に活用する動詞に連續せしむる時誤ること多し。

佐行四段の動詞には必ず しし ししか とすべし なしし時 なししかば

佐變及び下二段には必ず せし せしか とすべし せし せしかば

八 指定の助動詞

1 なり にはにありの約りたるものなり(ニにの Naとなりしもの)

將然 なら 入學するならむ 學者ならむ

連用 なり 入學するなりけり 學者なりけり

終止 なり 入學するなり 學者なり

連體 なる 入學するなるべし 學者なるべし

既然 なれ 入學するなれば 學者なれば

こは、右の如く、動詞の連體及び名詞に連續す。

右の如くすべきに、誤りて左の如くするもの多し。

記せし事 殺せしかば 談せし者 著はせしかども 落せし物  
任しし事 おはししかば 欲しし物 出發ししかば 入學しし生徒

欲せし人 欲せしかば 記せし事 記せしかば  
寄せし時 寄せしかば 任せし時 任せしかば

又てにはに續きては、

夢ばかりなる云々

形容詞にも連體に續く。

これのみなり

善きなり

悪しきなり

烈しきなり

副詞に續くものは、亦にありのなりとなるものにて、副詞の下ににの あるものに限る。

詳なり

明なり

豊なり

稀なり

こは 詳に(副詞)あり(良變)即ち詳にあり の Nani が Nani となりしなり。名詞に續くものは、右に出せる例の如きものと、左の如きものとあり。

駿河なる富士の山

信濃なる淺間が山

この例は にありの適例なり。こは古來用ゐられる例なれども、斯る例に似たるによりてか、往々左の如き誤謬をなす者あり。

河内の國に楠木正成なる者あり

議會なるものは、云々

此等は、といふの意に、用ゐたるものなれども、といふの意にはなりを用ゐず。此等は必ず

楠木正成といふ者あり 議會といふものは とすべきなり。又多く副詞に用ゐらるゝ漢語に、なりを續くることあるは、副詞に續けたるものと同じ。

懇切なる待遇 寛大なる處置

此等は亦副詞の用法と少しも異なることなし。

2 たり こは、名詞に接續するものなり。

將然 たら

父は、父ならずとも、子は子ならずばあるべからず

連用 たり

錚々たりし人なり

終止 たり

人心恟々たり

連體 たる

滔々たる天下

既然 たれ

漠然たれども

このたりは、過去のたりと異なり。混ずべからず。

九 打消しの助動詞

1 ず こは、動詞の將然に連續するものなり。

將然 ず  
連用 ず  
終止 ず  
連體 ぬ  
既然 ぬ  
消えずばありとも花と見ましや  
消えずなりぬ  
春は來れども花咲かず  
道ならぬ事  
吹かれど花は散るものを 人こそ見えぬ秋は來にけり

2

ざり 亦動詞の將然に連續するものなり。

將然 ざら  
連用 ざり  
終止 ざり  
連體 ざる  
既然 ざれ  
行かざらむ  
行かざりけり  
花の木にあらざらめとも咲きにけり  
(古くして例少し)  
行かざる者は  
行かざれば  
こは前のずにあ  
きて、之が約りてざりとなりしものなり。故に意義も、動  
詞に連續する段  
に同じ。

3

まじ 推量りていふ語にて、言語のまいに同じ。動詞の終止に連續し、其體

のみにに連體に連續するものなり。この活用は、形容詞と同じ。  
將然 まじく  
連用 まじく  
終止 まじ  
連體 まじき  
すまじき事  
既然 まじけれ  
雨降るまじければ、出發せむ  
4 じ 前のまじと同じ意なり。動詞の將然に連續するものなり。  
終止 じ  
かへらじとかれて思へば あらじとぞ思ふ  
連體 じ  
漫に人を寄せじものを 相見て後は逢はじものを

一〇 推量の助動詞

1 らし 現在の推量にて、動詞の終止に連續し、其體のみにに連體に連續するものなり。  
終止 らむ  
まづ心なく花のちるらむ  
雲のいづこに月やとるらむ

連體 らむ

萩の花のちるらむ小野

既然 らめ

色も香も同じ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける

このらむは、過去のぬ及びつに續きて左の如くなることあり。

なりぬらむ

有りつらむ

2 めり 動詞の終止に連續し、其變のみに、其連體に連續するものなり。

終止 めり

あはれ今年の秋もいぬめり 紅葉亂れて流るめり

連體 める

鶯の花にぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさむ

既然 めれ

人毎にいふめれど

こは、見えありの意にて、亦推量なり。

3 まし 是亦推量の意なり。動詞の將然に連續するものなり。

終止 まし

春はすぐともかたみならまし 消えずばありとも花と見ましや

連體 まし

寝なましものをさよふけて かはらぬ松ぞあるじならまし

既然 ましか 有らましかば

4 らし 推量の意にて、動詞の終止に連續し、其變のみに、連體に連續するものなり。

終止 らし

春すぎて夏きたるらし 山の白雪つもるらし

連體 らし

雪げの水ぞ今まさるらし

既然 らし

ぬきみだる人こそあるらし

このらしは名詞の下に接續して、人らしき學者らしとする語とは同じからず。

5 べし こは推量の意もあれど、二三の意を含むものなり。

明日は天氣なるべし

我が兄子がくべき宵なり (推量の意)

出頭すべし

城固くして抜くべからず (命令の意)

流急にして渉るべからず

すべからざる事 (可能の意)

人の守るべき道

(當然の意)

かく種々の意味を含めども、文章の前後の關係によりて知ることを得。

この助動詞は、動詞の終止に連續し、其變のみに、連體に連續するものなり。

將然 べく 之をも忍ぶべくは孰をか忍ぶべからざらむ

連用 べく 克く勤むべく又克く遊ぶべし

終止 べし 服膺すべし

連體 べき 學生の勤むべき道

既然 べけれ 明日晴天なるべければ、旅行せむ

こは過去のつぬに連りてつべしぬべしとなる。意味は、推量なれども、強し。

(注意)このべしは終止に連續すべきものなるに、誤りて

得るべし 捨てべからず 入れべからず 觸れべからず

と書くことあり。

得べし 捨つべからず 入るべからず 觸るべからず

と訂すべきなり。

6 けむ 過去のけりに未來のむを添へたる意。故に過去を推量するものなり。

動詞の連用に連續するものなり。

終止 けむ 何時の頃なりけむ 是は誰なりけむ

連體 けむ 西行が詠じけむ歌 行きけむ人の音づれもなし

既然 けめ さればこそ討たしめられけめ かくとこそはいひけめ

一 對比の助動詞

1 如し 動詞助動詞の連體及び天爾波ののがにつくものなり。

將然 如く 君のいへる如くば

連用 如く 怨むが如く、訴ふるが如し

終止 如し 犬の如し

連體 如き 海の如き量

古は、語尾のくしきを省きて、神のごと といへしことあり。

一二 感歎の助動詞

1 なり 動詞の終止に連續するものなり。

なり なり なる なれ





感歎	對比	推量							
		凡ての動詞	凡ての動詞	良變	良變の外凡て	良變	良變の外凡て	良變	良變の外凡て
凡ての動詞	のが及び動詞の	終止	連體	連用	將然	連體	終止	連體	終止
す	する	離れ	有る	有る	有る	積る	有る	流る	有る
なら	如く	○	○	べく	○	○	○	○	○
なり	如く	○	○	べく	○	○	○	○	○
なり	如し	けむ	まし	べし	らし	めり	めり	らむ	らむ
なる	如き	けむ	まし	べき	らし	める	める	らむ	らむ
なれ	○	けめ	まし	べけれ	らし	めれ	めれ	らめ	らめ

打消	指示	過去			
		凡ての動詞	加變	加變	凡ての動詞
凡ての動詞	凡ての動詞	凡ての動詞	凡ての動詞	凡ての動詞	凡ての動詞
終止	將然	連體	連用	將然	連用
有る	授け	する	し	せ	き
まじく	ざら	なら			
まじく	ざり	なり			
まじ	○	なり	○	○	○
まじ	ざる	なる	○	○	○
まじけれ	ざれ	なれ	○	○	○
まじけれ	たれ	なれ	○	○	○
	なれ	なれ	○	○	○
	なれ	なれ	○	○	○
	なれ	なれ	○	○	○

### 第六章 形容詞

#### 1-1

##### 形容詞の分類

本来のものと轉成のものあり。

##### 本来の形容詞

は語尾活用す。其數は甚だ多きにより卷末に一覽を出す。

例 將然 連用 終止 連體 既然

##### 1 第一種(くしき活)

善しく しく しき けれ

##### 2 第二種(しくしき活) 悪しく しく しき しけれ

名詞動詞等の形容詞となるとき、及び第一種形容詞の重なりたるときは、第二種形容詞の活用と同じ。

荒々しき 重々しき 輕々しき 猛々しき 長々しき

苦々しき 若々しき 遠々しき 疾ましき 好ましき

望ましき 願はしき 思はしき 憂々しき 鬱陶しき

忌はしき 嘆はしき 花々しき 騒々しき

由々しき 事々しき

#### 2

##### 轉成の形容詞 副詞及漢語より成るなり

神々しき 甚だしき

豊なる 詳なる 明なる 速なる 愚なる 確なる

朗なる 健なる 暖なる 鮮なる 盛なる 稀なる

寛大なる 有名なる 高尚なる 美麗なる 粗末なる 簡單なる

温順なる 残忍なる 活潑なる 温乎たる 確乎たる 判然たる

漠然たる 堂々たる 滔々たる 輝々たる 茫々たる

# 第七章 副詞

## 一 副詞の分類

副詞にも本来のものと、轉成のものとのあり。

### 1 本来の副詞

靜に

詳に

必ず

先づ

彌々

等

### 2 轉成の副詞

久しく  
宜しく  
善く  
長く(形容詞はくにて副詞となる)

極めて  
始めて  
兼れて  
試に(動詞より來るもの)

大抵  
嚴重に  
懇切に(漢語)

## 二 性質上の分類

### 1 時に關するもの

前に	毎年	日々	明年	今日	既に	方に	將に	今	昔
						昨日	明日	今年	昨年
						曾て	夙に	常に	直に
						月々	年々	毎日	毎月
						久しく	やがて	しばし	暫く
						後に	始めて	終に	遂に

### 2 程度に關するもの

俄に	悉く	いと	等しく	僅に	概れ	一切	俄に	終りに	豫め	忽ち	速に
	皆	多く	同じく	普く	宛も	なかば		早晩			
	甚だ	稍々	多く	廣く	益々	過半					
	頗る	漸く	大に	稀に	彌々						
	最も	たゞ	少しく	略々	大かた						
	全く	聊か	殆ど	凡て	大抵						

### 3 數次に關するもの

第一に	再び	度々	屢々	折々	一回
第二に					

### 4 場所に關するもの

遙に	そこに	あしこに	いづくに	こなたに
前に	近く	遠く	上に	下に
傍に	後に	東に	西に	斜に
	内に	外に		

5 状態に関するもの

明に	巧に	恣に	真に	思ふに	更に	偶々	乃ち	蓋し	兼ねて	寛大に
詳に	盛に	豊に	實に	恭しく	互に	各々	則ち	専ら	到底	嚴重に
靜に	新に	穩に	誠に	しか	私に	凡そ	即ち	剩へ	畢竟	苛酷に
具に	猥に	試に	特に	若し	竊に	必ず	豈に	何ぞ	萬一	簡單に
細に	鮮に	頻に	殊に	かく	當に	尙ほ	抑々	いづれか	丁寧	
嚴に	懇に	確に	共に	げに	適々	猶ほ	況や	いかに	懇切に	

副詞のにももてるものに、ありの連りて詳なりと約ることあり。

明なり 詳なり 靜なり 盛なり

助動詞の指定の條(三〇頁)を参照すべし。

第八章 天仁波

第一 主辭につくもの はげぞなむこそがのし  
 第二 賓辭につくもの をにへよりからまで  
 第三 連絡を示すもの のがつて(にて、して、にして、

第四 反意を示すもの ともどもがにを  
 第五 分量を示すもの だにすらさへのみばかり  
 第六 重ねていふもの とも  
 第七 疑問を示すもの やか(やは かは)  
 第八 禁止を表すもの なな||そ

1 主辭につくもの

1 は 名詞及び動詞助動詞形容詞の連體につく、  
 義經はやがて滅びぬ 人は木石にあらず  
 捨つるは惜し 學問に志すは可なり

2 是より善きはなし  
ば 前ののはの濁りしものなり。  
貧しきは幸なり

3 人をば毀らず  
字をばかけども盡をばかかず  
唯々月を見て西東をば知りける  
名をばさぬきのみやつことなむいひける

3 ぞ なむ 名詞天仁波及び動詞形容詞につく。  
聲きく時ぞ秋はかなしき  
都ぞ春の錦なりける  
白きを見れば夜ぞふけにける  
奈良の御時よりぞひろまりにける  
雲かとのみなむ覺えける  
人丸が下に立たむ事かたくなむありける  
もとひかる竹なむ一ふしありける  
その動詞につくは、其連體に限る。

4 こそ ぞに似て意、強し。  
月見ればちとに物こそかなしけれ  
人こそ見えぬ  
ぞなむは第二の係り辭なれば、之を結ぶには、必ず動詞、助動詞、形容詞の連體に限る。

かたみこそ今はあだなれ  
こそその文中にあるときは、第三の係り辭なるにより、之を結ぶには、動詞助動詞、形容詞の既然に限る。

ぞなむとこそとは文章の末尾に用ゐらるることあり。餘情を有たしむるなり。  
今はなしとぞ 何々なりとぞ  
奉らしめてなむ 同じ花どもおぼえぬまでになむ  
感すべき事にこそ 往來の道に出てこそ

又ぞは疑問の文の末に用ゐらる。  
此處はいつこそ 聲する者は誰ぞ  
文法とは何ぞ

5 が の 文章の主辭につくものなり。  
鳥が鳴く 見るがわびしぞ  
うつらふがうき

孔子のいはく  
春風のいたくふくらし

静心なく花の散るらむ

6

し 意味を強くする語にして、古は強め辭ともいへり。  
必ずしも  
無きにしもあらず

時しあれば龍も雲井にのぼるなり 名にしおはゞいざ言問はむ都鳥

### 二 賓辭につくもの

1 を 事を處置するときに用ゐる語なり。

文を作る 人を譽む

國を治め家を齊ふ

こは、瀬を早み、皆をあらみのなとは異なり。このなは感動詞に入る。

をば他動詞の上につくものなれども、自動詞の上につけて、家を去る、門を過ぐ

川を涉ると用ゐることあり。されどこの用法は、この二三に過ぎず。

2 に 事物を定めて、其下に添ふる語なり。

(イ) 家に在り 地に落つ 器に入る

(ロ) 彼に劣る 已むに優れり 學ぶに如かず

(ハ) 朝に出て夕にかへる 月夜に梅の花を折りて

(ニ) 弟に桃を興ふ 義家兵法を匡房に學ぶ

右の如く種々に用ゐれども、明白に事物を定めて、其下に添ふるは同じ。

3 へ 方向を指すに用ゐる語なり。

東へ下る 西へ向ふ 都へとて出て立つ

前のにとへとは同じ様なれども、異なり。右の例にても知らるべく、次の例は、

二語を近き處に用ゐたり。

天竺へ石のはちとりにまがる(竹取物語)

舟にのるべき所へわたる(土佐日記)

4 より から 事物の移りゆく發端を示す語なり。

三月より五月まで  
梅檀は二葉より芳し  
明日からは云々

西より東に廻る  
藍は藍より取りて云々  
始めから終りまで

よりは又比較にも用ゐらる。

水よりも寒し

藍よりも青し  
楓葉は二月の花よりも紅なり

5 ままで 事物の移り行く點を示すものなり。

行く末まで 苔のむすまで

王公より庶人に至るまで

### 三 連絡を示すもの

1 のが つ 三語ともに名詞と名詞との間に在りて兩者の關係を示す。

机の上	富士の山	箱の中	人の物	この品
天が下	我が家	梅が香	關が原	月が瀬

天つ風	國つ社	外つ國	みをつくし	末つ方
瀧つ瀬	沖つ白浪	先つ頃	たなはたづめ	

2 のは今日まで普遍に用ゐらるれども、がつは古語にして用法限りあり。

ては過去の助動詞つゝの活用のでなれども、用法廣きが故に、別に此處にも出せるなり。

日くれて道遠し  
都にて花を見る  
木にて造る  
家貧しくして苦辛す  
手してさくけて飲む  
斯の如くにして云々  
字を書かむとて机に凭る  
緯々として餘裕あり

友に逢ひて舊事を談ず  
學校にて學ぶ (漢字於に當る)  
刀にて斬る (漢字以に當る)  
逢はずして返る  
米して返り事す  
鋭敏にして學を好む  
花を見むとて家を出づ  
一として可なるはなし

3 つゝ 過去の助動詞つゝを重ねたるものなり。

我衣手は露にぬれつゝ、  
こはぬれつぬれつして、現在の動作の繼續するをあらはせるなり。  
4 文章の終結せるもの、及び名詞をうく。

孔子といへる聖人あり 空海は三筆の一人と稱せらる

文章の終結せるをうくる故に、上の係り辭に應じて之を結びたる後をうく。

海賊追ひくといふこと絶えずきこゆ(くは加變の終止なり)

人目も草も枯れぬと思へば(ぬは過去の助動詞の終止なり)

暫くたきものすと知りながら云々(すは佐變の終止なり)

うしと見し世ぞ今はこひしき(うしは形容詞の終止なり)

同じくぞ雪つもるらむと思へども(らむは推量の助動詞にて、ぞを結びしなり)

それになむ定むべきといへば(べきは連體にて、なむを結びしなり)

光やあると見れば(あるは良變の連體にて、やを結びたるなり)

幾世か經しと問はましものを(しはきの連體にて、かを結びしなり)

共にこそ花をも見めと待つ人の(めは未來のむの既然にてこそを結びしなり)

見せ奉り給へといへば(給へは命令にて、文章は一旦終りしなり)

烈しかれとは祈らぬものを(かれはくあれにて命令なり)

くるゝかと思ればあけぬる夏の夜を(かは疑問にて文章は終りしなり)

斯くのたまふはたぞといふ(たぞは疑問にて文章の終りなり)

又左の如き用例あれど名詞をうけしものと同じ。

ちると見てあるべきものを梅の花 春ごとに流るゝ川を花と見て

松柏摧けて薪となり桑田變じて海となる

(注意)第五の重ねて言ふとは異なり。

とのうけ方を誤りて左の如く連體につくることあり。

もとは富豪なりしといふ(しは連體なり、きと訂すべし)

入會することを得るとき(得るも連體なりるを削るべし)

5 ば 動詞助動詞形容詞の將然と既然とにつく。



將然につく場合

明日雨ふらば延期せむ

君わたりなば舵かくしてよ

浅くば渉らむ

既然につく場合

年ふれば齡は老いぬ

浅ければ渉る

この將然につくと既然につくとによりて、委くは動詞語尾連續表を見よ。

この既然につくものは、理由をいふに用ゐらる。

風吹けばえいてたす

世の中にある人、事業しげきものなれば、心に思ふ事を見る物きく物につけて

將然につくばにやのつきて希求の意となることあり。

打たば碎けむ

行かざばあるべからず

烈しくば止めむ

明けぬればくるよものとは知りながら

烈しければ止めたり

時の前後の差あり。前の例にて知るべ

見せばやな

6 であすしての意にて、動詞の將然につく。

人づてならで

4 反意を表すもの

前文と稍々異なる意を表す語なり。

1 とも 動詞の終止及び形容詞の連用につく。

學若し成らずんば死すとも歸らじ

2 とも 動詞助動詞形容詞の既然につく。どのみにてともをそへても同じ

追へども及ばず

高けれども登らる

色も香も同じ昔にさらめど年ふる人ぞあらたまりける(らめは推量のらむの既然)

前のは未定に用ゐ、このどもは既定に用ゐるなり。

行かばや

行かてはかなふまじ

追ふとも及ぶまじ

強くとも破らむ

打てども碎けず

強けれども破る

春毎に花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり(なめはなむの既然)

3 未定 心焉に在らずば、見るとも見えじ、聞くとも聞えじ、食ふとも其味を知らじ  
 既定 心焉に在らざれば、見れども見えず、聞けども聞えず、食へども其味を知らず  
 が に を

初は貧賤なりしが後には顯達の身となれり  
 深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若葉つみけり  
 日をだにも天雲ちかく見るものを都へと思ふ道のほるけさ  
 夏の夜はまた宵ながらちけぬるを雲のいづこに月宿るらむ  
 吹かれど花はちるものを心短き春の山風

五 分量を示すもの

1 だに 小きもの輕きものをあげて、大なるもの重きものを言外に含ましむる  
 語なり、されどだには種々の場合に用ゐらる。  
 實の一つだになきぞかなしき (一ツもなき意)  
 螢ばかりの光だになし (少しもなき意)

3 さへ 添ふる意にて、一あるが上に又一といふ意なり。

2 すら だにと意略々同じ  
 鳥獸すら此の如し、まして人をや  
 亂世にてすら然りまして太平の時をや  
 春雨すらを間つかひにする

1 聲立てし鳴けや鶯一とせに二たひとだにくべき春かは (前と略同じ)  
 けふだにいひがたしまして後には如何ならむ (輕きものをあげ)  
 深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若葉つみけり(前と同じ)  
 心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らむ(せめて是ばかりの意)  
 香をだにぬすめ春の山風 (前と同じ)  
 おく露の光をだにも宿さまし (前と同じ)  
 だにのの省かれてもと重りて 左の如くなることあり  
 鳥にだも如かざるべけんや

橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれどいやとこはの樹  
梓弓おして春雨今日ふりぬ明日さへふらば若葉つみてむ  
月をだにあかずおもひて寐ぬものを郭公さへ鳴きしきるかな  
のみ ばかり 一ありて二あらざるをあらはすものなり。

是のみなり 己のみ

1 六 重ねていふもの

と 語句を重ねていふときに用ゐる語なり。連続のとは異なり。

筆と紙とを携へて来るべし 日本と露國との戦争

連続のとは、文の終結せしをうくるものなれども、このとは左の如く動詞形容詞の連體をうく

勤むると怠るとは 見ると聞くと云々  
嬉しきと悲しきと交々至る

2 も 動詞形容詞の連體につく。

1 七 疑問を示すもの

か 諸種の語につき、動詞形容詞には、其連體につく。

誰か知らむ 孰か善き

有るか無きかに 知るか知らぬか

2 や 諸種の語につき動詞形容詞には、其終止につく。

物や思ふ 人や在る

去年とやいはむ今年とやいはむ 知るや知らずや

有りや無しや 上に疑問の意ある語のあるときは、下にかを添ふることを得れども、やを添ふべからず。

幾何なるか 孰を是とするか

右は可なり。されども左の如くすべからず。

貴きも賤しきも 往くもかへるも別れては知るも知らぬも逢坂の關

幾何なりや

何者なりや

右は不可なり。上に幾何、何者の如き疑問の語あればなり。

やかは疑よりして、やがて反語となるものなり。

消えずばありとも花と見ましや  
明日もありとは頼むべき身か

3

かくてのみ止むべきものか

月やは物を思はする

色こそ見えぬ香やはかくるよ

天竺にあるものも、もてこぬものかは

かはるは人の心のみかは

1 八

禁止を示すもの

な 動詞助動詞の終止につき、良變にのみは連體につく

今更に山へかへるな時鳥聲の限りは我宿になけ

2

な 此のそは動詞助動詞の連用につくものなり。

主人なしとて春な忘れそ

なこそ(勿來)

物思ふ我に聲なきかせそ

けふ波な立ちを

第九章 接續詞

且 且消え且結びて云々  
 又 馬に乗り又車に乗る  
 又 馬又は馬車に乗りて  
 はた 霞か雲かけた雪か  
 或は 汽車に乗り、或は船に乗りて  
 若くは 車若くは船に乗りて  
 及び 英國及び佛國は  
 并に 家屋并に庭園  
 されど 犬は畜類なり されど記憶の強きは驚くべし  
 若かれども 水は低きにつく 若かれども搏たば人の頭をも越えしむべし  
 若かも 流は絶えずして去かも元の水にあらず  
 されば 某は義侠なり されば人の急救を見れば必ず救ふ  
 さらば 彼は慈善家なりと聞く さらば凶年飢饉には彼必ず窮民を救助せむ

讀み且書く  
 晴れて又曇る  
 木又は石にて造る

學校若くは寺院にて

犬猫及び狼は  
 筆墨并に書籍を携へて

第十章 感動詞

一 語の上につくもの

あゝ 盛ならずや  
 あゝ 忠臣楠氏之墓  
 あな かなしこ  
 あなうれし  
 あはれ 今年秋もいぬめり  
 やよ 小供  
 やよ ほととぎす  
 やよ 山ほととぎす言つてむわれ世の中にすみわびぬとも  
 いて 人は言のみぞよき  
 いて 我を人などがめそ大舟の云々  
 いて やこの世に生れては  
 いざ 立ちよりに見て行かむ  
 いざ 言とはむ都島

二 中間に介るもの

も 無きにしもあらず  
 獨かもれむ

三 語の下づくもの

を

苦をあらみ

八重垣つくる其八重垣を

や

なさけなや

ありがたの世や

難波津に咲くやこの花

か

空蟬の世にも似たるか櫻花

あかなくにまだしも月のかくるとか

か

夜半の月かな

思の如くものたまふかな

か

三笠の山に出てし月かも

が

いふよしもがな

飛ぶが如くに都へもがな

(希望の意)

が

世の中は常にもがもな

今を盛りの君が御世がも

(希望の意)

な

移りにけりな

契りきな

か

かくてもいませかし

な

外山の霞立たずもあらなむ

今一たびの御幸待たなむ

(希望の意)

このなむは動詞の將然につく

(注意)なむは三様ありて紛れ易し。

イ助動詞のなむ 渡らば錦中や絶えなむ

心は花になさげなりなむ

ロ天仁波のなむ 柿本人麿なむ歌の聖なりける

竹なむありける

ハ感動詞のなむ 二條院へおはしまさなむ

行かなむ

イは連用につづき、ロは連體又は名詞につづき、ハは將然につづく。是にて區別

するを可なりとす。

第十一章 接頭語 接尾語

接頭語接尾語は、獨立には用ゐられず。語の前後に附隨せるものなり。

一 接頭語

1 意義を有つもの

み(御)	み代	み笠	ご所
ご(御)	ご家老	ご紋	
をん(御)	をん覺え	をん車	
す(素)	す肌	す顔	
ま(生)	ま喬麥	ま糸	
ま(眞)	ま中	ま夜中	
おほ(大)	おほ紱	おほ地主	
こ(小)	こ松原	こ屋	
を(小)	を川	雨のをやみ	

2 意義なきもの

にひ(新)	にひ壘	にひ嘗
はつ(初)	はつ春	はつ孫
うひ(幼)	うひ學び	うひ陣
もろ(諸)	もろ人	もろ共に
えせ(似非)	えせ法師	えせ歌よみ
いや(彌)	いやます	
いく(幾)	いく世	いく日
くせ	くせ者	くせ事
ほの	ほの見えて	ほのくらし

さ霧	さ迷ふ
み吉野	み熊野
た謀る	た易し

か 易し  
け 歴さる  
うち 見る

か 弱し  
け 劣る  
うち 揃ふ

二 接尾語

1 複数を示すもの

ら	汝ら	彼ら
だち	公だち	御身だち
どち	友どち	思ふどち
ばら	殿ばら	奴ばら
ども	女ども	子ども
がた	宮がた	先生がた

西郷大久保ら

2 名詞とするもの

高さ 嬉しさ

3 動詞とするもの

み	重み	深み
ぶ	古ぶ	鄙ぶ
ぶる	學者ぶる	大人ぶる
めく	春めく	唐めく
めかす	今めかす	ほのめかす
がる	嬉しがる	恐しがる

(は行上二段に活用す)  
(ぶの他動、ら行四段に活用す)  
(か行四段に活用す)  
(めくの他動、さ行四段に活用す)  
(ら行四段に活用す)

4 形容詞とするもの

たし	行きたし	有りたき事
らし	學者らし	先生らし
がまし	をこがまし	勝手がまし
たし	たく	たき
らし	らしく	らしき
たし	たく	たけれ
らし	らしく	らしけれ

(動詞の連用につく)  
(名詞につく)  
(名詞につく)



がまし

がましく

がましく

がまし

がましき

がましけれ

5 副詞とするもの

ごとほ

人ごとに

年ごとに

づゝ

一人づゝ

壹回づゝ

み

瀬をはやみ

苦をあらみ

さほ

淋しさに

悲しさに

ながら

昔ながらの山櫻

神ながらの道

枝ながら見よ

序でながら

憚りながら

見ながら行く

聞きながら筆記す

吹くからに

聞くからに

ものから

いたましうするものから

待つ人にあらぬものからはつかりの

ものゆゑ

たが秋にあらぬものゆゑ 天の河原におひぬものゆゑ

なべに

日暮のなきつるなべに日はくれぬ

がて  
がてら  
ぼかり  
まほく

我が宿をしも過ぎがてになく  
花見がてらに來る人は すゞみがてら  
螢ばかりの光だになし さばかりの事  
聲のまにく 神のまにく

(難きなり)  
(ほどの意なり)  
(まゝを重ねたるもの)

第十二章 係り結び

係り辭

結び辭

第一

はも徒  
正成は忠臣なり  
正行も忠臣なり  
花咲く

雪は白し  
月も白し  
風清し

終止にて結ぶ

第二

ぞなむ  
香ぞにほひぬる  
人なむありける  
物や思ふ

折ぞ善き  
折なむ善き  
人やある

連體にて結ぶ

第三

かこそ  
孰か善き  
人こそ知られ

何かあらむ  
折こそ善けれ

既然にて結ぶ

法 說 直

推 量

オシなまし

オシなむ

オスべし

オスめり

オスらし

オサまし

オスらむ

未 來

オサむ(ん)

オシたりき

オシたりけり

オシにき

オシにけり

オシにたり

オシてき

オシなまし

オシなむ

オスべき

オスめる

オサまし

オスらむ

オサむ(ん)

オシたりける

オシたりし

オシにし

オシにける

オシにたり

オシてし

オシなむ

オスべけれ

オスめれ

オサましか

オスらめ

オサめ

オシたりけれ

オシたりしか

オシにけれ

オシにたれ

オシにけれ

第十三章 動詞語尾連續表

使役及び所動の助動詞は次に記したれば茲には其一端を出したるのみ過推は過去の推量なり片假名は動詞にて平假名は助動詞天仁波なり。

一 四段活用 例 推す

上 然諾之部

終止(尋常の結び)

連體(第二の結び)

既然(第三の結び)

現在

オス

オセリ

オシつ

オシぬ

オシたり

オシけり

オシき

過去

オシてけり

オス

オセる

オシつる

オシぬる

オシたる

オシける

オシし

オシてける

オセ

オセれ

オシつれ

オシぬれ

オシたれ

オシけれ

オシしか

オシてけれ

法 說 曲

希望

オシたし  
オシてよ

命令

オセ

連續

オシて

推量

オスべければ  
オスらめど

既定

オセば  
オシたれば  
オセど(も)  
オシたれど(も)

未定

オサば  
オスとも

オサなむ  
オシれ

オスべし

オスべけれど

オシつれば  
オシければ  
オシつれど(も)  
オシけれど(も)

オシなば

オシぬれば  
オシしかば  
オシぬれど(も)  
オシしかど(も)

オサばや

所動

オサる

使役

オサす  
オサしむ

指定

オスなり

過推

オシげむ  
オシつらむ  
オシぬらむ  
オシにけむ  
オシたらむ  
オシたりけむ

オシぬべし  
オシてむ  
オシつべし

オサるる

オサする  
オサしむる

オスなる

オシけむ  
オシつらむ  
オシぬらむ  
オシにけむ  
オシたらむ  
オシたりけむ

オシぬべき  
オシてむ  
オシつべき

オサるれ

オサすれ  
オサしむれ

オスなれ

オシけめ  
オシつらめ  
オシぬらめ  
オシにけめ  
オシたらめ  
オシたりけめ

オシぬべけれ  
オシてめ  
オシつべけれ

法 說 曲

法

推量

オサざるべければ  
オサざらめど

既定

オサざりしかば  
オサれど(も)

未定

オサず(ん)ば  
オサずとも

所動

オサれず

使役

オサせず  
オサしめず  
オキざらしむ

オサざるべければ

オサざれど(も)

オサざれば

オサざりければ

オサざりしかど(も)

オサせぬ  
オサせざる  
オサしめぬ  
オサしめざる  
オサざらしむる  
オサれぬ  
オサれざる

オサせぬ  
オサせざれ  
オサしめぬ  
オサしめざれ  
オサざらしむれ  
オサれぬ  
オサれざれ

説 直

下 拒 否 の 部

指定

オサざるなり

過推

オサざりけむ

推量

オサまじ  
オサざらまし  
オサざるべし

未來

オサざらむ

過去

オサざりけり  
オサざりき

現在

オサす

終止

連體

オサぬ  
オサざる

既 然

オサれ  
オサざれ

オサざりけれ

オサざりしか

オサざらめ

オサまじき

オサざらまし

オサざるべき

オサざりけむ

オサまじけれ

オサざらましか

オサざるべけれ

オサざりけめ

直説法

推量

オチなまし  
オチぬべし  
オチてむ  
オチつべし

オチなまし  
オチぬべき  
オチてむ  
オチつべき

オチなまし  
オチぬべけれ  
オチてめ  
オチつべけれ

未來

オチむ  
オツらむ  
オチまし  
オツらし  
オツめり  
オツべし  
オチなむ  
オチたりけり

オチむ  
オツらむ  
オチまし  
オツめり  
オツべき  
オチなむ  
オチたりける

オチむ  
オツらめ  
オチましか  
オツめれ  
オツべけれ  
オチなめ  
オチたりけれ  
オチたりしか

二 上 然諾の部 例 落つ

連續 オサずして  
禁止 オスな

オサて  
なオシそ

オスべからず

現在

オツ  
オチつ  
オチぬ  
オチたり  
オチけり  
オチき  
オチてけり  
オチてき  
オチにたり

オツル  
オチつる  
オチぬる  
オチたる  
オチける  
オチし  
オチてける  
オチてし  
オチにたる

オツレ  
オチつれ  
オチぬれ  
オチたれ  
オチけれ  
オチしか  
オチてけれ  
オチにたれ

終止

連體

既然

過去

法

現在

オチず  
終止

オチぬ  
連體  
オチざる

オチれ  
既然  
オチざれ

下 拒否の部

希望

オチたし  
オチてよ

オチなむ  
オチれ

オチばや

命令

オチヨ

オツべし

連續

オチて

推量

オツれど(も)  
オチたれど(も)  
オツべければ  
オツらめど

オチつれど(も)  
オチけれど(も)  
オツべけれど

オチぬれど(も)  
オチしかど(も)

説曲

既定

オツレば  
オチたれば

オチつれば  
オチければ

オチぬれば  
オチしかば

未定

オチば  
オツとも

オチなば

オチらるれ

所動

オチらる

オチらるる

オチらるれ

使役

オチさす  
オチしむ

オチさする  
オチしむる

オチさすれ  
オチしむれ

指定

オツルなり

オツルなる

オツルなれ

過推

オチけむ  
オチつらむ  
オチぬらむ  
オチにけむ  
オチたらむ  
オチたりけむ

オチけむ  
オチつらむ  
オチぬらむ  
オチにけむ  
オチたらむ  
オチたりけむ

オチけめ  
オチつらめ  
オチぬらめ  
オチにけめ  
オチたらめ  
オチたりけめ

直説法

過去

オチざりけり  
オチざりき

オチざりける

オチざりし

オチざりけれ

オチざりしか

未來

オチざらむ

オチざらむ

オチざらめ

推量

オチまじ  
オツまじ

オツまじき  
オチざらまし

オツまじけれ  
オチざらましか

過推

オチざらまし  
オチざららし  
オチざるべし  
オチざりけむ

オチざるべき  
オチざりけむ

オチざるべけれ  
オチざりけめ

未定

オチずば  
オチずとも

オチされば  
オチざれど(も)

オチざりしかば  
オチざりしかど(も)

曲説法

既定

オチねば  
オチねど(も)

オチされば  
オチざれど(も)

推量

オチざるべければ  
オチざらめど

オチざるべけれど

連續

オチずして

なオチそ

オツべからず

禁止

オツな

三 下二段活用 例 拾つ

上 然諾の部

現在

スツ  
ステフ  
ステぬ  
ステたり  
ステけり  
ステき

終止

連體

既然

スツル

ステつる

ステぬる

ステたる

ステける

ステし

スツレ

ステつれ

ステぬれ

ステたれ

ステけれ

ステしか

法

所動	使役	指定	過推	ステぬべし	ステぬべき	ステぬべけれ
				ステてむ	ステてむ	ステてめ
				ステつべし	ステつべき	ステつべけれ
				ステけむ	ステけむ	ステけめ
				ステつらむ	ステつらむ	ステつらめ
				ステぬらむ	ステぬらむ	ステぬらめ
				ステにけむ	ステにけむ	ステにけめ
				ステたらむ	ステたらむ	ステたらめ
				ステたりけむ	ステたりけむ	ステたりけめ
				スツルなり	スツルなる	スツルなれ
				ステさす	ステさする	ステさすれ
				ステしむ	ステしむる	ステしむれ
				ステらる	ステらるる	ステらるれ

説 直

推量	未來	過去	ステぬべし	ステぬべき	ステぬべけれ
			ステてむ	ステてむ	ステてめ
			ステつべし	ステつべき	ステつべけれ
			ステけむ	ステけむ	ステけめ
			ステつらむ	ステつらむ	ステつらめ
			ステぬらむ	ステぬらむ	ステぬらめ
			ステにけむ	ステにけむ	ステにけめ
			ステたらむ	ステたらむ	ステたらめ
			ステたりけむ	ステたりけむ	ステたりけめ
			スツルなり	スツルなる	スツルなれ
			ステさす	ステさする	ステさすれ
			ステしむ	ステしむる	ステしむれ
			ステらる	ステらるる	ステらるれ



直説法

過推

ステざりけむ

推量

ステまじ  
ステざらまし  
ステざるべし

未來

ステざらむ

過去

ステざりけり  
ステざりき

現在

ステず

下 拒否の部

終止

連體

既然

ステまじき  
ステざらまし  
ステざるべき  
ステざりけむ

ステまじ  
ステざらむ

ステぬ  
ステざる  
ステざりける  
ステざりし

ステぬ  
ステざる

ステぬ  
ステざれ  
ステざりけれ  
ステざりしか

ステまじけれ  
ステざらましか  
ステざるべけれ  
ステざりけめ

曲説法

未定

ステば  
スツとも

ステなば

既定

スツれば  
ステたれば  
スツレど(も)  
ステたれど(も)

ステつれば  
ステければ  
ステつれど(も)  
ステけれど(も)

ステぬれば  
ステしかば  
ステぬれど(も)  
ステしかど(も)

推量

スツべければ  
スツらめど

スツべけれど

連續

ステて

命令

ステヨ

スツべし

希望

ステたし  
ステてよ

ステなむ  
ステれ

ステばや







説曲

既定

キたれば  
クレば

キつれば  
キければ

キぬれば  
キしかば

未來

コば  
クとも

キなば

所動

コらる

コらるる

コらるれ

使役

コさす

コさする

コさすれ

指定

クルなり

クルなる

クルなれ

過推

キつらむ  
キぬらむ  
キにけむ  
キたらむ  
キたるらし  
キにけらし

キつらむ  
キぬらむ  
キにけむ  
キたらむ

キつらめ  
キぬらめ  
キにけめ  
キたらめ

法説直

推量

クべし  
キけむ

クべき  
キけむ

クべけれ  
キけめ

未來

コむ

コむ

キたりしか

過去

キにけり  
キたりけり  
キたりき  
キけり  
キたり

キにける  
キたりける  
キたりし  
キし  
キける  
キたる

キにけれ  
キたりけれ  
キたりしか  
コしか  
キしか  
キけれ

現在

ク

クル

クレ

終止

連體

既然

法説曲

連続

推量

既定

未定

コザして

コザらめど

コザるべければ

コザるべけれど

コねど(も)

コねば

コざれど(も)

コざれば

コざりしかど(も)

コざりしかば

法説直

過推

推量

未來

過去

コざりけむ

クまじ  
コザるべし

コざらむ

コざりけり

コざりけむ

クまじき  
コザるべき

コざらむ

コざりける

コざりけむ

クまじけれ  
コザるべけれ

コざらめ

コざりけれ

法

推量

クべければ

クべけれど

キたれど(も)

キつれど(も)

キけれど(も)

キぬれど(も)

キしかど(も)

キぬれど(も)

命令

コ

コ

希望

キたし

キてよ

下

推否の部

現在

コザ

終止

コザる

コぬ

連體

コザれ

コれ

既然



直説法

推量

スマジ  
セざらまし  
セざるべし

スマジキ  
セざらまし  
セざるべき

スマジけれ  
セざるべけれ

未來

セジ  
セざらむ

セぬ  
セざる  
セざりける  
セざりし  
セざらむ

セれ  
セざれ  
セざりけれ  
セざりしか  
セざらめ

過去

セざりけり  
セざりき

セぬ  
セざる  
セざりける  
セざりし  
セざらむ

セれ  
セざれ  
セざりけれ  
セざりしか  
セざらめ

現在

セズ  
終止

連體

既然

下 拒否の部

希望

シたし  
シてよ

セばや  
シれ

曲説法

所動

セらる

セらるる

セらるれ

未定

セば  
スとも

シなば

既定

スレば  
シたれば  
スレど(も)  
シたれど(も)

シつれば  
シければ  
シつれど(も)  
シけれど(も)

シぬれば  
セしかば  
シぬれど(も)  
セしかど(も)

推量

スべければ  
スらめど

スべけれど

連續

シて

スべし

命令

セヨ



説 直

推量

イヌらし

イナまし

イヌらむ

未來

イナむ

イニたりき

イニたりけり

イニてき

イニてけり

イニき

イニけり

イニたり

イニつ

現在

イヌ

終止

イヌル

連體

イヌレ

既然

七

上 然諾の部

奈行變格

例

往ぬ

禁止 スな

連續 セずして

なシそ

せて

スへからず

法説曲

推量

セざるべければ

セざらめど

セざるべけれど

既定

セれば

セれど(も)

セざれば

セざれど(も)

セざりしかば  
セざりしかど(も)

未定

セず(入)ば

セずとも

過推

セざりけむ

セざりけむ

セざりけめ

法 說 曲

希望

イニたし

イナばや

イナなむ

命令

イ子

イヌべし

連續

イニて

推量

イヌべければ  
イヌらめど

イヌべけれど

既定

イヌレば  
イニしかば  
イヌレど(も)  
イニしかど(も)

イニけれど(も)

イニたれど(も)

未定

イナば  
イヌとも

イニければ

イニたれば

法

所動

イナる

イナるる

イナるれ

使役

イナす  
イナしむ

イナする  
イナしむる

イナすれ  
イナしむれ

指定

イヌルなり

イヌルなる

イヌルなれ

過推

イニけむ  
イニつらむ  
イニたらむ  
イニたりけむ

イニけむ  
イニつらむ  
イニたらむ  
イニたりけむ

イニけめ  
イニつらめ  
イニたらめ  
イニたりけめ

イヌめり  
イヌべし  
イニてむ

イヌめる  
イヌべき  
イニてむ

イヌめれ  
イヌべけれ  
イニてめ

法説曲

禁止

イヌな

ないニ

イヌへからず

連續

イナずして

イナで

推量

イナざるべければ  
イナざらめど

イナざるべけれど

既定

イナれば  
イナざりしかば  
イナれど(も)  
イナざりしかど(も)

イナざれど(も)

イナざりけれど(も)

未定

イナずば  
イナずとも

イナざれば

イナざりければ

法説直

下 拒否の部

終止

イナず

連體

イナぬ  
イナざる

已然

イナれ  
イナざれ

現在

イナざりけり  
イナざりき

イナざりける  
イナざりし

イナざりけれ  
イナざりしか

過去

イナざらむ

イナざらむ

イナざらめ

未來

イナじ

推量

イナざらまし  
イヌまじ  
イナざるべし

イナざらまし  
イヌまじき  
イナざるべき

イナざらましか  
イヌまじけれ  
イナざるべけれ

過推

イナざりけむ

イナざりけむ

イナざりけめ

八 良行變格 例 居り

上 然諾の部

現在

ナリ 終止

連體

既然

過去

ナリつ  
ナリたり  
ナリけり  
ナリき  
ナリにき  
ナリたりけり  
ナリたりき

未來

ナラむ

ナリつる  
ナリたる  
ナリける  
ナリし  
ナリにし  
ナリたりける  
ナリたりし  
ナラむ

ナリつれ  
ナリたれ  
ナリけれ  
ナリしか  
ナリにしか  
ナリたりけれ  
ナリたりしか  
ナらめ

法 說 直

推量

ナルらむ  
ナラまし  
ナルらし  
ナルめり  
ナルべし  
ナリなむ  
ナリなまし  
ナリぬべし  
ナリてむ  
ナリつべし

過推

ナリけむ  
ナリつらむ  
ナリぬらむ  
ナリにけむ

ナルらむ  
ナラまし  
ナルめる  
ナルべき  
ナリなむ  
ナリなまし  
ナリぬべき  
ナリてむ  
ナリつべき  
ナリけむ  
ナリつらむ  
ナリぬらむ  
ナリにけむ

ナルらめ  
ナラましか  
ナルめれ  
ナルべけれ  
ナリなめ  
ナリぬべけれ  
ナリてめ  
ナリつべけれ  
ナリけめ  
ナリつらめ  
ナリぬらめ  
ナリにけめ

説直

未來

ナラざらむ

過去

ナラざりけり  
ナラざりき

現在

ナラず  
終止

下 拒否の部

希望

ナリたし  
ナリてよ

命令

ナレ

連續

ナリて

推量

ナルべければ  
ナルらめど

連體

ナラぬ

ナラざる

ナラざりける

ナラざりし

ナラざらむ

既然

ナラぬ

ナラざれ

ナラざりけめ

ナラざりしか

ナラざらめ

ナルべけれど

ナルべし

ナラなむ

ナラばや

法説曲

既定

ナレば  
ナリければ  
ナレど(も)  
ナリけれど(も)

未定

ナラば  
ナルとも

所動

ナラる

使役

ナラす  
ナラしむ

指定

ナルなり  
ナリたりけむ  
ナリたりけむ

ナリなば

ナリつれば

ナリしかば

ナリつれど(も)

ナリしかど(も)

ナリたらむ  
ナリたりけむ

ナルなる

ナラする

ナラしむる

ナラるる

ナリたらめ  
ナリたりけめ

ナルなれ

ナラすれ

ナラしむれ

ナラるれ

ナリたれば

ナリたれど(も)

法

推量

ナラじ  
ナルまじ  
ナラざらまし  
ナラざるべし

過推

ナラざりけむ

ナルまじき  
ナラざらまし  
ナラざるべき  
ナラざりけむ

ナルまじけれ  
ナラざらましか  
ナラざるべけれ  
ナラざりけめ

法説曲

未定

ナラずば  
ナラずとも

既定

ナラれば  
ナラざりしかば  
ナラれど(も)

ナラざれば

ナラざれど(も)

ナラざりければ

ナラざりしかど(も)

推量

ナラざるべければ  
ナラざらめど

ナラざるべけれど

連續

ナラずして

ナラて

禁止

ナルな

なナリそ

ナルべからず

同同同同同同  
 良奈同同同同  
 變變  
 三 上二 下二 上二 下二 加 佐  
 變變

推 打 間 讀 降 死 居  
 さ た は ま なら なら 居  
 せ け せ せ せ せ せ  
 (得) (着) (着) (着) (着) (着) (着)

使役の助動詞

さす

む、め。ず、ぬ。ね。さら、ざり、ざる、され。じ。  
 て、つ、つる、つれ。な、に、ぬ、ぬる、ぬれ。  
 たら、たり、たる、たれ。けり、ける、けれ。き、し、しか。  
 てむ、てめ。なむ、なめ。けむ、けめ。ば。  
 べく、べし、べき、べけれ。まじ、まじき。と、とも。  
 する(名詞) なら、なり、なる、なれ。  
 すれば。ど、ども。  
 せよ

四 二 良 奈 佐 下 上 下 上 四  
 段 段 變 變 變 一 一 二 二 段  
 二 使役の助動詞

行 盡 え せ け せ 居 往 居  
 か さ さ せ せ せ せ 居 往 居  
 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 (得) (着) (着) (着) (着) (着) (着) (着) (着)

使役の助動詞

す

む。ず、ぬ。ね。さら、ざり、ざる、され。じ。  
 て、つ、つる、つれ。な、に、ぬ、ぬる、ぬれ。  
 たら、たり、たる、たれ。けり、ける、けれ。き、し、しか。  
 てむ、てめ。なむ、なめ。けむ、けめ。ば。  
 べく、べし、べき、べけれ。まじ、まじき。と、とも。  
 しむる(名詞) なら、なり、なる、なれ。  
 しむれば。ど、ども。  
 しめよ

第十四章 助動詞連續表

四 所動の助動詞

二段 行か 推さ 打た 問は 讀ま 降ら 往な 居ら

る れ る る る る る る

む、め。ず、ぬ、れ。さら、ざり、ざる、され。じ。  
て、つ、つる、つれ。な、に、ぬ、ぬる、ぬれ。  
たら、たり、たる、たれ。けり、ける、けれ。き、し、しか。  
てむ、てめ。なむ、なめ。けむ、けめ。ば  
べく、べし、へき、へけれ。まじ、まじき。らむ、めり。と、と  
るる(名詞)なら、なり、なる、なれ。  
るれ。ば。ど、ども。  
れよ

さすれば。ど、ども  
させよ

五 所動の助動詞

上二 盡き

む、め。ず、ぬ、れ。さら、ざり、ざる、され。じ。

下上二 下 加 佐 變 變

え き さ け こ せ

て、つ、つる、つれ。な、に、ぬ、ぬる、ぬれ。  
たら、たり、たる、たれ。けり、ける、けれ。き、し、しか。  
てむ、てめ。なむ、なめ。けむ、けめ。ば。  
らる べく、べし、へき、へけれ。まじ、まじき。らむ、めり。と、と。  
らるる(名詞)なら、なり、なる、なれ。  
るれ。ば。ど、ども。  
れよ

六 使役の助動詞と所動の助動詞との連続

行か 捨て 行か 居ら 盡き

しめ せ せ

む、め。ず、ぬ、れ。さら、ざり、ざる、され。じ。  
て、つ、つる、つれ。な、に、ぬ、ぬる、ぬれ。  
たら、たり、たる、たれ。けり、ける、けれ。き、し、しか。  
てむ、てめ。なむ、なめ。けむ、けめ。ば。  
らる べく、べし、へき、へけれ。まじ、まじき。らむ、めり。と、と。  
らるる(名詞)なら、なり、なる、なれ。



直説法

使役	過推	推量	未來	過去	現在
タカからしむ	タカかりけむ	タカからまし タカかるべし タカかるべし	タカからむ	タカかりき タカかりけり	タカカシ タカかりけり

タカからしむ	タカかりけむ	タカからまし タカかるべき	タカからむ	タカかりし タカかりけり	タカキ タカかりける
--------	--------	------------------	-------	-----------------	---------------

タカからしむ	タカかりけむ	タカからまし タカかるべし	タカからむ	タカかりしか タカからめ	タカケレ タカかりけれ
--------	--------	------------------	-------	-----------------	----------------

上 然諾の部

例 高し

第十五章 形容詞語尾連續表

四段 上二 下二 下二 加一 佐一 奈一 良一 名詞

行く 盡く 捨つ 着る 蹴る くる すす 往ぬ 居る 忠實

なり	なら	なる(名詞)	なれ	なれ
けり、ける、けれ。き、し、しか。	む、め。まし、ましか。しめ、しむ、しむる、しむれ。ず、ぬ、ね。さら、さり、さる、され。じ。で。ば。	へく、へし、へき、へけれ。らむ、らめ。めり。	ば。ど。ども	なれ

七 せ

指定の助動詞 なり

らるれば。ど。ども。



あぶ(浴)ハ上二他  
あぶむ(仰)カ四他  
あぶむ(扇)カ四他  
あぶす(浴)サ下二他  
あふる(溢)ラ下二自  
あふる(炙)ラ四他  
あへむ(喘)カ四自  
あます(餘)サ四他  
あまる(餘, 剩)ラ四自  
あみす(浴)サ下二他  
あむ(編)マ四他  
あやまつ(過)タ四他  
あやまる(誤, 謬)ラ四自  
あゆむ(歩)マ四自  
あらず(寃)サ四他  
あらしむ(争)ハ四他  
あらたまる(改)ラ四自  
あらたむ(改, 革, 更)マ下二他  
あらはす(見, 表, 現, 顯, 著)サ四他  
あらはる(見, 表, 現, 顯, 著)ラ下二自  
あらふ(洗, 濯)ハ四他  
あり(有, 在)ラ變自

ありく(歩)カ四自  
ある(荒, 蕪)ラ下二自  
あるく(歩)カ四自  
  
い  
いかす(活)サ四他  
いかる(怒, 恚)ラ四自  
いきどほる(憤, 慍)ラ四自  
いく(生, 活)カ上二自  
いこふ(息, 憇)ハ四自  
いざなふ(誘)ハ四他  
いざむ(勇)マ四自  
いざむ(諫)マ下二他  
いそむ(急)カ四自  
いだく(抱, 擁, 懷)カ四他  
いたす(致)サ四他  
いだす(出)サ四他  
いたたく(頂, 戴)カ四他  
いたはる(勞)ラ四他  
いたむ(痛)マ四自  
いたむ(傷, 悼, 悵)マ下二他  
いたる(至, 到, 詣)ラ下二自

動詞一覽

片假名は活用の行, 數字は活用の段, 自他は自動他動の符號なり

あ

あかす(明)サ四他  
あがなふ(購)ハ四他  
あがむ(崇)マ下二他  
あかる(明)ラ四自  
あがる(上, 揚)ラ四自  
あきなふ(商)ハ四他  
あく(明, 開)カ四自  
あく(開)カ下二他  
あく(飽, 厭)カ四自  
あく(上, 揚, 舉)カ下二他  
あくがる(焦慮)ラ下二自  
あげつらふ(論)ハ四他  
あぎける(嘲)ラ四他  
あぎむく(欺)カ四他  
あそぶ(遊, 游)ハ四自  
あだす(寇)サ變他  
あたたまる(温, 暖)ラ四自  
あたたむ(温暖)マ下二他  
あたふ(能)ハ四自

あたふ(興)ハ下二他  
あたる(當, 中, 方)ラ四自  
あぢはふ(味)ハ四他  
あつ(中, 當, 宛)タ下二他  
あつかふ(扱)ハ四他  
あつかる(興)ラ四自  
あつかる(預)ラ四他  
あつく(預)カ下二他  
あつまる(集, 聚, 萃)ラ四自  
あつむ(集, 蒐, 輯)マ下二他  
あつらふ(誂)ハ下二他  
あなどる(侮)ラ四他  
あばく(訐, 發)カ四他  
あはず(合, 併)サ四他  
あはず(合, 併)サ下二他  
あはれむ(憐, 矜)マ四他  
あふ(合)ハ四自  
あふ(逢, 遇, 遭, 逅, 會)ハ四自  
あふ(敢)ハ下二他

りたふ(歌, 謠, 謳)ハ四他  
 りつ(伐, 討, 打撃)々四他  
 りづくまる(躰)ラ四自  
 りつず(移, 遷)サ四他  
 りつず(寫)サ四他  
 りつたふ(訴, 訟)ハ下二他  
 りづまる(埋)ラ四自  
 りづむ(埋, 填)マ下二他  
 りづむく(俯)カ四自  
 りつる(移, 遷, 徙)ラ四自  
 りつる(映)ラ四自  
 りつろふ(移)ハ四自  
 りながす(促)サ四他  
 りなづく(領)カ四自  
 りばふ(奪, 篡)ハ四他  
 りまる(埋)ラ四自  
 りまる(生, 産)ラ下二自  
 りむ(倦)マ四自  
 りむ(熟)マ四自  
 りむ(産)マ四他  
 りむ(績)マ四他  
 りむ(埋)マ下二他  
 りめく(呻吟)カ四自  
 りもる(埋)ラ下二自

りやぶ(敬)ハ四他  
 りらなふ(卜, 占)ハ四他  
 りらむ(怨, 恨)マ四他  
 りらむ(怨, 恨)マ下二他  
 りらやむ(羨)マ四他  
 りる(賣, 估)ラ四他  
 りる(賣)ラ下二自  
 りるふ(潤)ハ四自  
 りるほす(潤)サ四他  
 りるほふ(潤, 濕, 沾)ハ四自  
 りれふ(憂, 患, 愁)ハ下二他

に

ねらふ(選擇)ハ四他  
 ねらむ(選擇)マ四他

お

おかす(侵, 犯, 冒)サ四他  
 おきなふ(補)ハ四他  
 おく(措, 置)カ四他  
 おく(起)カ上二自  
 おくる(送, 贈)ラ四他

いつくしむ(愛)マ四他  
 いつはる(偽, 詐)ラ四他  
 いづ(出)々下二自  
 いとなむ(營)マ四他  
 いとふ(厭)ハ四他  
 いどむ(挑)マ四他  
 いななく(嘶)カ四自  
 いぬ(寢, 寐)ナ下二自  
 いぬ(往)ナ變自  
 いのる(祈禱)ラ四他  
 いはふ(祝)ハ四他  
 いふ(云, 言, 曰, 謂)ハ四他  
 いぶかる(訝)ラ四他  
 いましむ(戒, 警)マ下二他  
 います(在)サ四自  
 いむ(忌, 諱)マ四他  
 いやしむ(賤, 卑)マ下二他  
 いやす(療)サ四他  
 いゆ(愈, 癒)ヤ下二自  
 いる(入)ラ四自  
 いる(入, 容)ラ下二他  
 いる(射)ア上一他  
 いる(鑄)ア上一他

いる(炒, 煎)ラ四他

う

う(得, 獲)ア下二他  
 うり(植, 栽)ワ下二他  
 うり(飢, 餓, 饑, 餒)ワ下二自  
 うかがふ(伺, 窺)ハ四他  
 うかす(浮)サ四他  
 うがつ(穿)々四他  
 うかぶ(浮, 泛)ハ四自  
 うかぶ(浮, 泛)ハ下二他  
 うかむ(浮, 泛)マ四自  
 うかむ(浮, 泛)マ下二他  
 うく(浮)カ四自  
 うく(受, 承, 請, 稟)カ下二他  
 うけがふ(肯)ハ四他  
 うごかす(動, 搖, 蕩)サ四他  
 うごく(動, 搖)カ四自  
 うしなふ(失, 喪)ハ四他  
 うす(失)サ下二自  
 うすらむ(薄)カ四自  
 うそぶく(嘯)カ四自  
 うたがふ(疑)ハ四他

おる(下,降)ラ上二自  
おろす(卸)サ四他

か

かうふる(蒙,被)ラ四他  
かうむる(蒙,被)ラ四他  
かかぐ(掲)カ下二他  
かかはる(拘,係,關)ラ四自  
かかふ(抱)ハ下二他  
かがむ(屈)マ四自  
かがむ(屈)マ下二他  
かがやかす(輝)サ四他  
かがやく(輝,耀)カ四自  
かかゝる(掛,係,罹,懸)ラ四自  
かぎる(限,盡)ラ四他  
かく(書)カ四他  
かく(缺,闕,虧)カ四他  
かく(缺,闕,虧)カ下二自  
かく(搔)カ四他  
かく(掛)カ下二他  
かぐ(嗅)カ四他  
かくす(隠,匿)サ四他  
かくる(隠)ラ下二自

かける(翔)ラ四自  
かこつ(託)タ四他  
かこふ(圍)ハ四他  
かこむ(圍)マ四他  
かぎす(挿頭)サ四他  
かぎなる(重)ラ四自  
かぎぬ(重)ナ下二他  
かぎむ(嵩)マ四自  
かぎる(飾)ラ四他  
かしぐ(炊)カ四他  
かしづく(傳)カ四自  
かす(貸,假)サ四他  
かすむ(霞)マ四自  
かすむ(掠)マ下二他  
かせぐ(稼)カ四自  
かぞふ(數,算)ハ下二他  
かたどる(象)ラ四他  
かたぶく(傾)カ四自  
かたまる(固)ラ四自  
かたむ(固)マ下二他  
かたむく(傾)カ四自  
かたむく(傾)カ下二他  
かたよる(偏)ラ四自

おくる(後)ラ下二自  
おとす(起,興)サ四他  
おこたる(怠,惰,懈)ラ四自  
おこなはる(行)ラ下二自  
おこなふ(行)ハ四他  
おこる(起,興)ラ四自  
おごる(奢,傲,驕)ラ四自  
おさふ(抑)ハ下二他  
おしひろむ(擴)マ下二他  
おす(推,押,壓)サ四他  
おそふ(畏)ハ四他  
おそる(恐,畏,怖,懼,悞)ラ下二自  
おちいる(陷)ラ四自  
おつ(落,墜,墮)タ上二自  
おづ(怖,懼)タ上二自  
おとしいる(陷)ラ下二他  
おとす(落)サ四他  
おどす(威,嚇)サ四他  
おとる(劣)ラ四自  
おどろかす(驚)サ四他  
おどろく(驚,愕,駭)カ四自  
おとろふ(衰)ハ下二自  
おはす(御座)サ變自

おびやかす(劫,脅)サ四他  
おふ(追,逐)ハ四他  
おふ(負)ハ四他  
おふ(生)ハ上二自  
おふ(帶,佩)ハ下二他  
おほす(生)サ四他  
おほす(果,遂)サ下二他  
おほす(仰)サ下二他  
おほふ(覆,蔽,掩,蓋)ハ四他  
おほゆ(覺)マ下二他  
おもぬる(阿)ラ四自  
おもふ(思,念,想,懷,惟,憶)ハ四他  
おもむく(赴,趣)カ四自  
おもんず(重)カ變他  
おもんばかり(慮)ラ四他  
おもんみる(惟,以)マ上一自  
おもる(重)ラ四自  
おゆ(老)マ上二自  
およぐ(泳,游)カ四自  
およぶ(及)ハ四自  
およぼす(及)サ四他  
おる(織)ラ四他

きす(着)サ下二他  
 きそふ(競)ハ四自  
 きたふ(鍛)ハ下二他  
 きたる(來)ラ四自  
 きづく(築)カ四他  
 きづつく(傷)カ四自  
 きづつく(傷)カ下二他  
 きはまる(極,窮)ラ四自  
 きはむ(極,窮,究)マ下二他  
 きむ(極)マ下二他  
 きゆ(消,滅)ヤ下二自  
 きよまる(清,淨)ラ四自  
 きよむ(淨,清)マ下二他  
 きらふ(嫌)ハ四他  
 きる(斬,切,斷,截,鑽)ラ四他  
 きる(斬,切)ラ下二自  
 きる(着)カ上一他

く

く(來)カ變自  
 くるむ(銜,哺)マ四他  
 くるむ(哺)マ下二他

くる(潜)ラ四他  
 くさざる(耕,耨)ラ四他  
 くさらかず(腐)サ四他  
 くさる(腐)ラ四自  
 くじく(挫,折)カ四他  
 くじく(挫,折)カ下二自  
 くしげづる(梳)ラ四他  
 くじる(抉)ラ四他  
 くるすぶる(燻)ラ四自  
 くだく(碎)カ四他  
 くだく(碎)カ下二自  
 くだす(下,降)サ四他  
 くだる(下,降)ラ四自  
 くだつ(朽)マ上二自  
 くだつかへず(覆)サ四他  
 くだつかへる(覆)ラ四自  
 くだづ(崩)サ四他  
 くだづる(崩,頽)ラ下二自  
 くだつろむ(寛)カ四自  
 くだどく(口説)カ四他  
 くはだつ(企)マ下二他  
 くははる(加)ラ四自  
 くはふ(加)ハ下二他

かねらふ(語)ハ四他  
 かねる(語)ラ四他  
 かつ(勝,克,捷)マ四自  
 かつぐ(擔)カ四他  
 かなしぶ(悲,哀)ハ四他  
 かなしむ(悲,哀)マ四他  
 かなづ(奏)マ下二他  
 かなふ(叶,協,適)ハ四自  
 かなふ(叶,協,適)ハ下二他  
 かね(兼)ナ下二他  
 かね(難)ナ下二自  
 かはす(交)サ四他  
 かはる(代,變,易,交)ラ四自  
 かね(飼,蓄)ハ四他  
 かね(買,估)ハ四他  
 かね(替,換,變,易,更)ハ下二他  
 かね(鬻)ハ上二自  
 かねる(被)ラ四他  
 かねず(返,還,歸)サ四他  
 かねんず(肯)サ變他  
 かねりみる(顧,省)マ上一他

かねる(歸,反,返,還,回,復)ラ四自  
 かねふ(構)ハ下二他  
 かねむ(嚙,咀,嚼)マ四他  
 かねる(被,冠)ラ四他  
 かねがふ(考,案,稽)ハ下二他  
 かねがみる(鑑,鑒)マ上一他  
 かねす(釀)サ四他  
 かねよふ(通)ハ四自  
 かねらす(枯,乾)サ四他  
 かねる(借)ラ四他  
 かねる(狩,獵)ラ四他  
 かねる(刈)ラ四他  
 かねる(枯,涸)ラ下二自  
 かねわく(乾)カ四自  
 かねざる(蒸)ラ四自

き

きく(聞,聽)カ四他  
 きどゆ(聞)ヤ下二自  
 きざす(兆,萌)サ四自  
 きざむ(刻,彫)マ四他  
 きしる(軋)ラ四自

こく(扱)カ四他  
 こぐ(漕)カ四他  
 ごとむ(屈, 跼)マ四自  
 ごとむ(屈, 跼)マ下二他  
 ごとゆ(凍)ヤ下二自  
 ところぎす(志)サ四他  
 ところみる(試)マ上一他  
 ところむ(試)マ上二他  
 としらふ(拵)ハ下二他  
 こそす(越)サ四自  
 こそす(漉, 濾)サ四他  
 こそぞる(擧)ラ四自  
 ことたふ(答, 對, 應)ハ下二自  
 ことなり(異)ラ變自  
 ことわる(斷)ラ四他  
 ことなす(消化)サ四他  
 ことなる(消化)ラ下二自  
 このむ(好)マ四他  
 とはす(毀)サ四他  
 とばむ(拒)マ四他  
 とはる(毀)マ下二自  
 こひねがふ(希, 冀)ハ四他  
 こふ(乞, 請, 丐)ハ四他

こふ(戀)ハ上二他  
 とぶ(媚)ハ上二自  
 とぼす(覆)サ四他  
 とぼつ(毀)マ四他  
 とほる(凍)ラ四自  
 とぼる(覆, 溢)ラ下二自  
 とまる(困)ラ四自  
 とむ(込, 籠)マ四自  
 とむ(込, 籠)マ下二他  
 ともる(籠)ラ四自  
 とやす(肥)サ四他  
 とゆ(肥)ヤ下二自  
 とゆ(越, 趁, 踰)ヤ下二自  
 たらす(凝)サ四他  
 たらす(懲)ム四他  
 とる(凝)ラ四自  
 とる(懲)ラ上二自  
 ところす(殺, 戮)サ四他  
 ところぶ(轉)ハ四自

さ

さがす(搜)サ四他

くはふ(銜)ハ下二他  
 くばる(配, 賦)ラ四他  
 くびる(絞, 縊)ラ四他  
 くびる(絞, 縊, 括)ラ下二自  
 くふ(食, 喰)ハ四他  
 くほむ(凹)マ四自  
 くほむ(凹)マ下二他  
 くみす(興)サ變自  
 くむ(組)マ四他  
 くむ(汲)マ四他  
 くもる(疊, 陰)ラ四自  
 くやむ(悔, 懺)ム四他  
 くゆ(悔)ヤ上二他  
 くらす(暮)サ四他  
 くらふ(食, 喰, 哺)ハ四他  
 くらぶ(比, 較, 校)ハ下二他  
 くらます(暗, 韜, 晦)サ四他  
 くらむ(暗, 眩)マ四自  
 くる(繰)ラ四他  
 くる(剝)ラ四他  
 くる(暮)ラ下二自  
 くる(興)ラ下二他

くくる(括)ラ四他  
 くる(眩)ラ下二自  
 くるしむ(苦, 困)マ四自  
 くるしむ(苦)ム下二他  
 くるはず(狂)サ四他  
 くるふ(狂)ハ四自  
 くろむ(黒, 黢)マ四自  
 くろむ(黒, 涅)マ下二他

け

けがす(穢)サ四他  
 けがる(穢, 汚, 漬)ラ下二自  
 けしかく(嗾)カ下二他  
 けす(消)サ四他  
 けづる(削, 刪)ラ四他  
 けふる(烟)ラ四自  
 けみす(閱, 檢)サ變他  
 けむる(烟)ラ四自  
 ける(蹴)カ下一他

こ

ころず(困)サ變自  
 とがす(焦)サ四他  
 とがる(焦)ラ下二自

さむらふ(候,侍)ハ四自  
 さゆ(訝)ヤ下二自  
 さらす(曝,晒)サ四他  
 さらふ(浚)ハ四他  
 さらふ(復習)ハ四他  
 さる(去,距)ラ四自  
 さわがず(騒)サ四他  
 さわぐ(噪,騒)カ四自

志

さがむ(擧,蹙)ヤ下二他  
 さかり(然,爾)ラ變自  
 さかる(叱,呵)ラ四他  
 さく(敷,布,藉)カ四他  
 さく(延)カ四自  
 さく(若,如)カ四自  
 さげる(茂,繁)ラ四自  
 さたがふ(從,隨,順,循,遵)ハ四自  
 さたがふ(從)ハ下二他  
 さたしむ(親)マ四自

さたふ(慕,景)ハ四他  
 さたる(垂)ラ下二自  
 さつまる(鎮)ラ四自  
 さづむ(沈)ム四自  
 さづむ(沈,鎮)マ下二他  
 さづらふ(繕)ハ四他  
 さぬ(死)ナ變自  
 さのぐ(凌)カ四他  
 さのぶ(思)ハ四他  
 さのぶ(忍,隱)ハ四自  
 さのぶ(忍,隱)ハ上二自  
 さばる(縛)ラ四他  
 さびる(痺)ラ下二自  
 さふ(強)ハ上二他  
 さふ(誣,罔)ハ上二他  
 さふる(濫)ラ四自  
 さへたぐ(虐)カ下二他  
 さほむ(凋,萎)マ四自  
 さほる(絞,挫)ラ四他  
 さまる(締)ラ四自  
 さむ(染)マ四自  
 さむ(染)マ上二自

さかのぼる(溯,溯)ラ四自  
 さかふ(逆,忤)ハ四自  
 さかゆ(榮)ヤ下二自  
 さからふ(逆)ハ四自  
 さかる(盛)ラ四自  
 さがる(下)ラ四自  
 さく(咲)カ四自  
 さく(裂,割,剖)カ四他  
 さく(裂)カ下二自  
 さく(避)カ下二自  
 さぐ(下)カ下二他  
 さぐ(提)カ下二他  
 さぐる(探,搜)ラ四他  
 さひぶ(叫,號)ハ四自  
 ささぐ(捧)カ下二他  
 ささはる(障)ラ四自  
 ささふ(支)ハ下二他  
 ささめく(私語)カ四自  
 ささやく(私語)カ四自  
 さす(刺,螫)サ四他  
 さす(挿)サ四他  
 さす(差,指)サ四他  
 さすらふ(流離)ハ四自  
 さする(摩)ラ四他

さそふ(誘)ハ四他  
 さだまる(定)ラ四自  
 さだむ(定)マ下二他  
 さづかる(授)ラ四自  
 さづく(授)カ下二他  
 さとす(諭)サ四他  
 さとる(覺,悟)ラ四自  
 さばく(捌)カ四他  
 さばく(捌)カ下二自  
 さはず(礙)サ四他  
 さはる(障)ラ四自  
 さぶ(錯)ハ上二自  
 さびる(荒)ラ下二自  
 さぶらふ(候,侍)ハ四自  
 さへぎる(遮)ラ四他  
 さへづる(轉)ラ四自  
 さます(冷)サ四他  
 さます(覺)サ四他  
 さまたぐ(妨)カ下二他  
 さまよふ(彷徨,迷)ハ四自  
 さまよふ(呻吟)ハ四自  
 さむ(覺,醒,寐)マ下二自  
 さむ(冷)マ下二自



すぼむ(窄)マ下二他  
 すます(澄, 濟)サ四他  
 すます(濟)サ下二他  
 すまふ(住)ハ四自  
 すまふ(相撲)ハ四自  
 すむ(住)ム四自  
 すむ(濟)マ四自  
 すむ(清, 澄)マ四自  
 すゆ(體)ヤ下二自  
 する(摺, 磨)ラ四他  
 する(刷)ラ四他  
 すわる(坐)ラ四自

せ

せく(急)カ四自  
 せく(咳)カ四自  
 せく(堰)カ四他  
 せまる(迫, 逼)ラ四自  
 せばむ(狭)マ下二他  
 せむ(攻)マ下二他  
 せむ(責, 譴)マ下二他  
 せる(競)ラ四他

ろ

そぐ(殺, 削)カ四他  
 そぐ(殺)カ下二自  
 そこなふ(毀, 損)ハ四他  
 そしる(毀, 譏, 誹, 謔, 誑, 諂)ラ四他  
 そそぐ(注, 漑, 澍)カ四他  
 そそのかす(唆)サ四他  
 そだつ(育)タ四自  
 そだつ(育)タ下二他  
 そなはる(備, 具)ラ四自  
 そなふ(備, 具)ハ下二他  
 そねむ(嫉, 猜)マ四他  
 そばだつ(峙)タ四目  
 そばだつ(歛)タ下二他  
 そはる(添)ラ四自  
 そびやかす(脅)サ四他  
 そびゆ(盤)ヤ下二自  
 そふ(添, 副, 沿, 傍)ハ四自  
 そふ(添, 副)ハ下二他  
 そぼつ(濡)タ四自  
 そまる(染)ラ四自

そむ(占)マ下二他  
 そむ(締)マ下二他  
 そめす(示)サ四他  
 そめす(濕)サ四他  
 そめる(濕)ラ四自  
 そらぶ(調, 査)ハ下二他  
 そらむ(白)マ四自  
 そりぞく(退, 却)カ四自  
 そりぞく(退, 斥, 擯, 屏)カ下二他  
 する(知, 識)ラ四他  
 する(記, 誌)サ四他  
 するしめす(知)サ四他  
 するむ(白)マ四自  
 する(萎)ラ下二自

す

す(爲)サ變他  
 すり(据)マ下二他  
 すかす(透)サ四他  
 すかす(賺)サ四他  
 すがる(緝)ラ四自  
 すく(好)カ四他

それたむ(認)マ下二他  
 それたる(滴)ラ下二自  
 すく(透)カ四自  
 すく(鋤)カ四他  
 すく(漉)カ四他  
 すぐ(過)カ上二自  
 すくふ(救, 濟)ハ四他  
 すぐる(勝)ラ下二自  
 すどす(過)サ四他  
 すさむ(荒)マ四自  
 すすく(煤)カ下二自  
 すすぐ(濯, 洒, 滌, 雪)カ四他  
 すすむ(進)マ四自  
 すすむ(進)マ下二他  
 すすむ(勸, 獎, 薦)マ下二他  
 すがむ(納涼)マ四自  
 すする(啜)ラ四他  
 すたく(集)カ四自  
 すたる(廢)ラ下二自  
 すつ(捨, 棄, 捐)タ下二他  
 すなどる(漁)ラ四他  
 すふ(吸, 吮)ハ四他  
 すふ(統, 總)ハ下二他  
 すべる(汙, 滑)ラ四自  
 すぼむ(窄)マ四自

たつ(立,起)々四自  
 たつ(立,建,樹)々下二他  
 たづさはる(携)ラ四自  
 たづさふ(携)ハ下二他  
 たづぬ(尋)ナ下二他  
 たてまつる(奉,上,獻)ラ四他  
 たとふ(譬,喩)ハ下二他  
 たどる(迪)ラ四他  
 たなびく(鬚鬚)カ四自  
 たのしむ(樂,娛)マ四他  
 たのむ(頼,恃)マ四他  
 たばぬ(束)ナ下二他  
 たはむる(戯)ラ下二自  
 たはる(狂,戯)ラ下二自  
 たひらぐ(平)カ四自  
 たひらぐ(平)カ下二他  
 たふ(堪,耐,任,勝)ハ下二自  
 たふす(倒,斃)サ四他  
 たふとふ(尊,貴,尙,崇)ハ四他  
 たふとむ(尊,貴,尙,崇)マ四他  
 たぶらかす(誑)サ四他  
 たふる(殞,倒,仆,僵,斃)ラ下二自  
 たます(馴)サ四他

たまはる(賜)ラ四他  
 たまふ(賜,給)ハ四他  
 たまる(溜)ラ四自  
 たまる(黙)ラ四自  
 たむ(溜)マ下二他  
 たむ(矯)マ下二他  
 たむく(手向)カ下二他  
 ためす(試)サ四他  
 ためらふ(躊躇)ハ四自  
 たもつ(保,有,持)々四他  
 たゆ(絶,斷)ヤ下二自  
 たゆむ(弛)マ四自  
 たよる(便)ラ四自  
 たらす(垂)サ四他  
 たる(足)ラ四自  
 たる(垂,低)ラ下二自  
 たわむ(撓)マ四自  
 たわむ(撓)マ下二他

ち

ちかふ(誓,盟)ハ四他  
 ちがふ(違)ハ四自  
 ちがふ(交)ハ四自  
 ちがふ(交)ハ下二他

そむ(染)マ四自  
 そむ(染)マ下二他  
 そむ(初)マ下二自  
 そむく(背,反,叛,乖)カ四自  
 そむく(背)カ下二他  
 そよぐ(戰)カ四自  
 そらす(反)サ四他  
 そらんず(諳)サ變他  
 そる(剃)ラ四他  
 そる(反)ラ下二自  
 そろふ(揃)ハ四自  
 そろふ(揃)ハ下二他

た

たがふ(差,違)ハ四自  
 たがふ(違)ハ下二他  
 たかまる(高)ラ四自  
 たかむ(高)マ下二他  
 たがやす(耕)サ四他  
 たぎる(滾)ラ四自  
 たく(燒,焚)カ四他  
 たく(長)カ下二自  
 たくはふ(貯,蓄)ハ下二他

たぐふ(比,類)ハ四自  
 たぐふ(比,類)ハ下二他  
 たくむ(工)マ四他  
 たける(猛)ラ四自  
 たしなむ(嗜)マ四他  
 たしなむ(審)マ四他  
 たしむ(嗜)マ四他  
 たす(足)サ四他  
 たすかる(助)ラ四自  
 たすく(助,佐,輔,扶,援)カ下二他  
 たたかふ(戰,鬪)ハ四自  
 たたく(叩,敲)カ四他  
 たたす(正,訂,質,糾,匡)サ四他  
 たたすむ(佇)マ四自  
 たたふ(湛)ハ四自  
 たたふ(湛)ハ下二他  
 たたふ(稱)ハ下二他  
 たたまる(疊)ラ四自  
 たたむ(疊)マ四他  
 たたよふ(漂)ハ四自  
 たたる(崇)ラ四自  
 たたる(爛,擧)ラ下二自  
 たつ(絶,斷,裁)々四他

つづく(續)カ四自  
 つづく(續)カ下二他  
 つつしむ(愼, 謹, 肅)マ四自他  
 つづまる(約)ラ四自  
 つつむ(包, 裹)マ四他  
 つづむ(約)マ下二他  
 つづる(綴)ラ四他  
 つどふ(集, 聚)ハ四自  
 つどふ(集, 聚)ハ下二他  
 つとまる(勤)ラ四自  
 つとむ(勤, 勉, 務, 力, 努, 勗)マ下二他  
 つながる(繋)ラ四自  
 つなぐ(繋, 維)カ四他  
 つのる(慕)ラ四自他  
 つひやす(費)サ四他  
 つひゆ(潰, 費)マ下二自  
 つぶす(潰)サ四他  
 つぶる(潰)ラ下二自  
 つぼむ(窄)マ四自  
 つぼむ(窄)マ下二他  
 つまづく(蹉, 跌, 躓)カ四自  
 つまむ(撮, 摘)マ四他

つまる(詰)ラ四自  
 つむ(積)マ四他  
 つむ(摘)マ四他  
 つむ(詰)マ下二他  
 つむぐ(紡, 績)カ四他  
 つもる(積)ラ四自  
 つよむ(強)マ下二他  
 つらなる(連, 列)ラ四自  
 つらぬ(陳, 列)ナ下二他  
 つらぬく(貫, 串, 撰)カ四他  
 つる(釣)ラ四他  
 つるす(釣)サ四他  
 つる(連)ラ下二自他

て

てらす(照)サ四他  
 てらふ(銜)ハ四他  
 てる(照)ラ四自

と

とかす(溶, 鎔)サ四他  
 とがむ(咎, 尤)マ下二他  
 とがる(尖)ラ四自

ちがふ(違)ハ下二他  
 ちぎる(契)ラ四他  
 ちぢまる(縮)ラ四自  
 ちぢむ(縮)マ四自  
 ちぢむ(縮)マ下二他  
 ちぢる(縮)ラ下二自  
 ちぬる(釁)ラ四他  
 ちらす(散)サ四他  
 ちりばむ(鏤)マ下二他  
 ちる(散)ラ四自

つ

ついづ(序)タ下二他  
 ついはむ(啄)マ四他  
 つかりまつる(事, 奉, 仕)ラ四自  
 つかさどる(司, 掌, 主)ラ四他  
 つかぬ(束)ナ下二他  
 つかはす(遣)サ四他  
 つかふ(使)ハ四他  
 つかふ(事)ハ下二自  
 つかふ(支, 問)ハ下二自  
 つがふ(番)ハ四自  
 つかへまつる(事, 奉, 仕)ラ四自

つかまつる(仕)ラ四自  
 つかむ(攫, 擷)マ四他  
 つかる(疲, 憊, 疲勞)ラ下二自  
 つかる(潰)ラ四自  
 つく(付, 附, 着, 即, 就)カ四自  
 つく(突, 衝, 撞)カ四他  
 つく(築)カ四他  
 つく(盡)カ上二自  
 つく(付, 附, 着)カ下二他  
 つく(潰)ナ下二他  
 つぐ(亞, 次, 尋)カ四自  
 つぐ(繼, 嗣, 接, 襲)カ四他  
 つぐ(注)カ四他  
 つぐ(告)カ下二他  
 つくす(盡, 悉, 竭)サ四他  
 つくなふ(償)ハ四他  
 つくむ(噤)マ四他  
 つくる(作, 造, 製)ラ四他  
 つくろふ(繕)ハ四他  
 つたはる(傳)ラ四自  
 つたふ(傳)ハ下二他  
 つちがふ(培)ハ下二他

なく(鳴啼泣)カ五自  
 なぐ(投擲)カ下二他  
 なぐ(雍)カ四他  
 なぐ(和風)カ上二自  
 なぐさむ(慰)マ五自  
 なぐさむ(慰)マ下二他  
 なげく(嘆歎)カ四自  
 なじる(詰)ラ四他  
 なす(爲作成濟)サ四他  
 なずらふ(準擬)ハ下二自  
 なするラ四他  
 なだむ(宥)マ下二他  
 なづ(撫)タ下二他  
 なづく(懷)カ四自  
 なづく(懷)カ下二他  
 なづむ(拘泥)マ四自  
 なびかず(靡)サ四他  
 なびく(靡)カ四自  
 なふ(綯)ハ四他  
 なふる(颯)ラ四他  
 なほす(直)サ四他  
 なほる(直)ラ四自  
 なまく(惰)カ下二自

なまる(訛)ラ四自  
 なむ(管)マ下二他  
 なやます(惱)サ四他  
 なやむ(惱艱)マ四自  
 ならす(馴)サ四他  
 ならす(鳴)サ四他  
 ならはず(習)サ四他  
 ならふ(習傲)ハ四他  
 ならぶ(竝雙)ハ四自  
 ならぶ(竝)ハ下二他  
 なる(爲成)ラ四自  
 なる(鳴)ラ四自  
 なる(慣馴狎)ラ下二自

に

ながす(逃)サ四他  
 にぎはす(賑)サ四他  
 にぎはふ(賑)ハ四自  
 にぎる(握)ラ四他  
 にぐ(逃遁亡)カ下二自  
 にくむ(憎惡)マ四他  
 にどす(濁)サ四他  
 にどる(濁)ラ四自

とく(説解釋)カ四他  
 とく(溶鎔融)カ四他  
 とく(溶鎔融)カ下二自  
 とぐ(研磨砥礪)カ四他  
 とぐ(遂)カ下二他  
 とぎす(鎖)サ四他  
 とづ(閉)タ上二他  
 とづ(綴)タ上二他  
 とづく(嫁歸)カ四自  
 とどく(届)カ四自  
 とどく(届)カ下二他  
 とどとほる(滯)ラ四自  
 ととのふ(調整齊)ハ四自  
 ととのふ(調整齊)ハ下二他  
 とどまる(止留駐)ラ四自  
 とどむ(止停留駐)マ下二他  
 とどろかず(轟)サ四他  
 とどろく(轟)カ四自  
 となふ(唱稱)ハ下二他  
 とばす(飛)サ四他  
 とふ(問訪)ハ四他  
 とぶ(飛)ハ四自  
 とぶらふ(吊訪)ハ四他

とほざかる(遠)ラ四自  
 とほざく(遠)カ下二他  
 とほす(通徹疏)サ四他  
 とほす(點)サ四他  
 とほる(通徹疏透)ラ四自  
 とほる(點)ラ四自  
 とます(富)サ四他  
 とまる(泊止留)ラ四自  
 とむ(富)マ四自  
 とむ(泊止停留)マ下二他  
 とぶらふ(吊訪)ハ四他  
 ともす(點)サ四他  
 ともなふ(伴)ハ四他  
 どもる(吃)ラ四自  
 とらかず(蕩盪)サ四他  
 とらふ(捕捉)ハ下二他  
 とる(取執採擊把)ラ四他

な

ながす(流)サ四他  
 ながむ(咏眺)マ下二他  
 ながらふ(活)ハ下二自  
 ながる(流)ラ下二自

のぞむ(望)マ四他  
 のぞむ(臨, 蒞)マ四自  
 のたまふ(宣)ハ四他  
 ののしる(晉, 罵)ラ四他  
 のぼす(延, 伸, 展)サ四他  
 のぶ(述, 宣, 申, 陳, 演)ハ  
 下二他  
 のぶ延, 伸, ハ下二他  
 のぶ(延, 伸, 暢)ハ上二自  
 のぼす(陞, 上, 陟)サ下二  
 他  
 のぼる(上, 登, 昇, 陟)ラ四  
 自  
 のむ(呑, 飲)マ四他  
 のる(乘, 騎)ラ四自  
 のろふ(咀, 詛, 咒)ハ四他

は

はらむる(葬)ラ四他  
 ばかす(化)サ四他  
 はからふ(計)ハ四他  
 はかる(計, 量, 測, 度, 圖,  
 謀)ラ四他  
 はく(吐, 嘔, 咯)カ四他  
 はく(掃)カ四他

はく(佩)カ四他  
 はぐ(矧)カ四他  
 はぐ(剝)カ四他  
 はぐ(剝)カ下二自  
 ばく(化)カ下二自  
 はびます(勵)サ四他  
 はびむ(勵)マ四自  
 はこぶ(運, 搬)ハ四他  
 はさまる(夾, 挾)ラ四自  
 はさむ(夾, 挾, 挿)マ四他  
 はじく(彈)カ四他  
 はじく(彈)カ下二自  
 はじまる(始)ラ四自  
 はじむ(始, 創, 肇)マ下二  
 他  
 はしる(走, 奔)ラ四自  
 はす(馳)サ下二自  
 はたす(果)サ四他  
 はたらく(働)カ四自  
 はつ(果)タ下二自  
 はづ(恥, 愧, 慚, 羞)タ上二  
 自  
 はづかしむ(辱)マ下二  
 他  
 はづす(外)サ四他  
 はづる(外)ラ下二自

はす(似)サ下二他  
 はなふ(擔, 荷)ハ四他  
 はほふ(匂)ハ四自  
 はよぶ(呻吟)ハ四自  
 はらむ(白眼, 瞰)マ四他  
 はる(似, 肖)ナ上一自  
 はる(糞, 烹)ナ上一自

ぬ

ぬ(寢)ナ下二自  
 ぬかす(拔)サ四他  
 ぬかる(泥濘)ラ四自  
 ぬきんづ(拔)タ下二自  
 ぬきんづ(擢)タ下二他  
 ぬく(拔, 擢, 抽)カ四他  
 ぬく(拔)カ下二自  
 ぬぐ(脱)カ四他  
 ぬぐ(脱)カ下二自  
 ぬくまる(溫)ラ四自  
 ぬすむ(盜, 竊, 偷)マ四他  
 ぬふ(縫)ハ四他  
 ぬらす(濡)サ四他  
 ぬる(塗)ラ四他  
 ぬるむ(微溫)マ四自

ね

ねがふ(願)ハ四他  
 ねぎらふ(勞)ハ四他  
 ねたむ(妬, 嫉)マ四他  
 ねづ(振)タ上二他  
 ねばる(粘)ラ四自  
 ねぶる(唾, 舐)ラ四他  
 ねむる(眠, 睡)ラ四自  
 ねらふ(狙)ハ四他  
 ねる(練, 鍊)ラ四他

の

のがす(逃)サ四他  
 のがる(逃, 遁)ラ下二自  
 のく(退)カ四自  
 のく(退)カ下二他  
 のとす(殘, 遺)サ四他  
 のとる(殘, 遺)ラ四自  
 のす(載)サ下二他  
 のぞく(除)カ四他  
 のぞく(覘)カ四他

ひそむ(潜)マ下二他  
 ひたす(浸, 漬)サ四他  
 ひたる(浸, 漬)ラ四自  
 ひねる(捻, 拈, 撚, 捫)ラ四他  
 ひびかず(響)サ四他  
 ひびく(響)カ四自  
 ひやす(冷)サ四他  
 ひゆ(冷)ヤ下二自  
 ひらく(開, 發, 闢)カ四自  
 ひらく(開, 發, 披, 闢)カ四他  
 ひらく(開)カ下二自  
 ひらむ(平)マ四自  
 ひらむ(平)マ下二他  
 ひらめかず(閃)サ四他  
 ひらめく(閃)カ四自  
 ひる(干, 涸)ハ上一自  
 ひる(曬)ハ上一自  
 ひる(簸)ハ上一他  
 ひるがへす(翻)サ四他  
 ひるがへる(翻, 飄)ラ四自  
 ひるむ(萎縮)マ四自  
 ひろがる(弘)ラ四自  
 ひろぐ(弘)カ下二他

ひろふ(拾, 撫)ハ四他  
 ひろまる(弘)ラ四自  
 ひろむ(弘)マ下二他

ふ

ふ(經, 歷)ハ下二他  
 ふかず(深)サ四他  
 ふく(吹, 噴)カ四自他  
 ふく(葺)カ四他  
 ふく(拭)カ四他  
 ふく(深)カ下二自  
 ふくむ(含, 銜)マ四他  
 ふくむ(哺)マ下二他  
 ふくらむ(脹)マ四自  
 ふくらむ(脹)マ下二他  
 ふくる(脹, 彭)ラ下二自  
 ふける(耽)ラ四自  
 ふさがる(塞)ラ四自  
 ふさぐ(塞)カ四他  
 ふさぐ(塞)カ下二他  
 ふす(伏, 臥)サ四自  
 ふす(伏)サ下二他  
 ふせぐ(防, 禦)カ四他

はなす(離)サ四他  
 はなす(談, 話)サ四他  
 はなつ(放, 發)マ四他  
 はなる(離)ラ下二自  
 はぬ(跳)ナ下二自  
 はぬ(刎, 撥)ナ下二他  
 はばかり(憚)ラ四自  
 はばむ(沮)マ四他  
 はびこる(蔓)ラ四自  
 はふ(匍匐, 這)ハ四自  
 はぶかる(省, 略)ラ四自  
 はぶく(省, 略)カ四他  
 ばべり(侍)ラ變自  
 はまる(填)ラ四自  
 はむ(食)マ四他  
 はむ(箴)マ下二他  
 はやす(生)サ四他  
 はやる(流行)ラ四自  
 はゆ(映)ヤ下二自  
 はゆ(生)ヤ下二自  
 はらす(晴)サ四他  
 はらふ(掃, 拂)ハ四他  
 はらふ(祓)ハ四他  
 はらむ(孕, 妊, 娠)マ四自

はる(張)ラ四自他  
 はる(貼)ラ四他  
 はる(晴, 霽)ラ下二自  
 はる(腫, 脹)ラ下二自

ひ

ひいづ(秀)マ下二自  
 ひかふ(扣, 控)ハ下二自他  
 ひがむ(僻)マ四自  
 ひがむ(僻)マ下二他  
 ひかる(光)ラ四他  
 ひさるる(率, 帥, 將)マ上一他  
 ひく(引, 挽, 曳, 牽)カ四他  
 ひく(引)カ四自  
 ひく(彈)カ四他  
 ひさぐ(販, 鬻)カ四他  
 ひさぐ(提)カ下二他  
 ひざまづく(跪)カ四自  
 ひしぐ(拉)カ四他  
 ひしぐ(拉)カ下二自  
 ひそまる(潜)ラ四自  
 ひそむ(潜)マ四自

まがふ(紛)ハ下二他  
 まかる(罷,退)ヲ四自  
 まがる(曲,屈,折)ヲ四自  
 まぎらはす(紛,混)サ四他  
 まぎる(紛,混)ヲ下二自  
 まく(蒔)カ四他  
 まく(卷)カ四他  
 まく(負)カ下二自  
 まぐ(曲,枉)カ下二他  
 まざる(優,勝)ヲ四自  
 まざる(混,雜)ヲ四自  
 まじなふ(咒)ハ四他  
 まじはる(交)ヲ四自  
 まじふ(交,雜)ハ下二他  
 まじる(交,雜)ヲ四自  
 ます(坐)サ四自  
 ます(増,益)サ四自他  
 まず(交,混,雜)サ下二他  
 またがる(跨)ヲ四自  
 またぐ(跨)カ四他  
 またたく(瞬)カ四自  
 まつ(待,俟,候)タ四他  
 まつる(奉)ヲ四他

まつる(祭,祀)ヲ四他  
 まどはず(惑)サ四他  
 まどふ(纏,絡)ハ四自他  
 まどふ(惑)ハ四自  
 まとまる(纏)ヲ四自  
 まとむ(纏)マ下二他  
 まどろむ(交睫)マ四自  
 まなぶ(學)ハ四他  
 まぬかる(免)マ下二他  
 まぬく(招)カ四他  
 まはず(廻,回,轉)サ四他  
 まはる(廻,回,轉)ヲ四自  
 まふ(舞)ハ四自他  
 まみゆ(見)ヤ下二自  
 まみる(塗)ヲ下二自  
 まもる(守,護)ヲ四他  
 まよはず(迷)サ四他  
 まよふ(迷)ハ四自  
 まろばす(轉)サ四他  
 まろぶ(轉)ハ四自  
 まろむ(丸)マ下二他  
 まるる(參)ヲ四自

ふむ(踐,踏,履)マ四他  
 ふやす(殖)サ四他  
 ふゆ(殖)ヤ下二自  
 ふらず(降)サ四他  
 ふらず(觸)サ四他  
 ふる(降)ヲ四自  
 ふる(振)ヲ四他  
 ふる(狂)ヲ下二自  
 ふる(觸)ヲ下二他  
 ふる(古,舊)ヲ上二自  
 ふるふ(震,奮)ハ四自  
 ふるふ(振,揮)ハ四他  
 ふるふ(篩)ハ四他  
 ふるぶ(古,舊)ハ上二自

へだたる(隔)ヲ四自  
 へだつ(隔)タ下二他  
 へつらふ(誑,諛)ハ四自  
 へらす(滅)サ四他  
 へりくだる(謙,遜)ヲ四自  
 へる(滅,耗)ヲ四自

ほ

ほこる(誇,伐,矜)ヲ四自  
 ほころぶ(綻)ハ上二自  
 ほす(干,乾)サ四他  
 ほだす(絆)サ四他  
 ほどとす(施,播)サ四他  
 ほどはしる(迷)ヲ四自  
 ほふる(屠)ヲ四他  
 ほむ(譽)マ下二他  
 ほゆ(吠,吼)ヤ下二自  
 ほる(堀)ヲ四他  
 ほる(恍惚)ヲ下二自  
 ほろぶ(亡,滅)ハ上二自  
 ほろぼす(亡,滅)サ四他

ま

まりく(設,儲)カ下二他  
 まりす(申,白)サ四他  
 まりづ(詣)タ下二自  
 まかす(負)サ四他  
 まかす(委,任)サ下二他

もだらす(齎)サ四他

もちふ(用, 須)ハ上二他

もちるる(用, 須)ヲ上一他

もつ(持, 以)タ四他

もてあそぶ(弄, 玩)ハ四他

もてなす(遇, 待)サ四他

もどす(戻)サ四他

もとむ(求, 索, 需, 須, 干)マ下二他

もどる(戻, 悖)ラ四自

もむ(揉)マ四他

もやす(萌)サ四他

もゆ(燃)ヤ下二自

もゆ(萌)ヤ下二自

もよほす(催)サ四他

もらす(漏, 洩)サ四他

もらふ(貰)ハ四他

もる(盛)ラ四他

もる(漏, 洩, 泄)ラ四自

もる(漏, 洩, 泄)ラ下二自

や

やく(焼, 焚)カ四他

やく(焼, 焚)カ下二自

やしなふ(養, 畜)ハ四他

やす(瘠, 瘦)サ下二自

やすまる(休)ラ四自

やすむ(休, 息)マ四自

やすむ(休)マ下二他

やすんず(安)サ變他

やすらふ(休)ハ四自

やつす(侑)サ四他

やつる(宴)ラ下二自

やどす(宿)サ四他

やとふ(雇, 傭)ハ四他

やどる(宿)ラ四自

やはらぐ(和)カ四自

やはらぐ(和)カ下二他

やぶる(破, 傷, 壞)ラ四他

やぶる(敗, 破, 壞, 敵)ラ下二自

やむ(止, 已, 罷, 歇)マ四自

やむ(病, 疾)マ四他

やむ(止, 罷)マ下二他

やる(遣)ラ四他

み

みがく(研, 磨)カ四他

みごもる(身籠)ラ四自

みす(見)サ下二他

みだす(亂)サ四他

みだる(亂, 紊)ラ下二自

みちびく(導)カ四他

みつ(滿, 充, 盈, 實)タ四自

みつ(充, 滿)タ下二他

みなぎる(漲)ラ四自

みのる(實, 熟)ラ四自

みまかる(身罷)ラ四自

みゆ(見)ヤ下二自

みる(見, 視, 看, 覽, 察)マ上一他

む

むかふ(向, 對, 嚮)ハ四自

むかふ(迎)ハ下二他

むく(向)カ四自

むく(向)カ下二他

むくゆ(報, 酬)ヤ上二他

むさぼる(食, 婪)ラ四他

むす(蒸)サ四他

むす(生, 産)サ四自

むすぶ(結)ハ四他

むせぶ(咽, 噎)ハ四自

むちりつ(鞭, 撻, 苔)タ四他

むらがる(群, 簇)ラ四自

むる(群)ラ下二自

め

めあはず(妻)サ下二他

めぐむ(惠, 恤)マ四他

めぐらす(繞, 廻)サ四他

めぐる(回, 廻, 周, 旋, 巡, 繞)ラ四自

めす(召, 徵)サ四他

めづ(愛)タ下二他

めとる(娶)ラ四他

も

もがく カ四自

もす(燃)サ四他

もたぐ(擡)カ下二他



わきまふ(辨)ハ下二他

わく(湧,沸,涌)カ四自

わく(分,別,頒,判)カ下二他

わしる(走,奔,趨)ラ四自

わする(忘,遺)ラ下二他

わだかまる(蟠)ラ四自

わたす(渡)サ四他

わたる(渡,涉,濟,亘)ラ四自

わづらはす(煩)サ四他

わづらふ(煩,累)ハ四自

わぶ(佗)ハ上二自

わぶ(詫)ハ上二他

わらふ(笑,晒,嗤)ハ四他

わる(割)ラ四他

わる(割)ラ下二自

ゐ

ゐる(居)ラ上一自

ゐる(率)ラ上一他

ゑ

ゑがく(畫)カ四他

ゑぐる(剗)ラ四他

ゑふ(醉)ハ四自

ゑむ(笑)マ四自

を

をがむ(拜)マ四他

をさめる(治,修,收,納)ラ四自

をさむ(治,修,收,納,藏)マ下二他

をしふ(教,訓,誨)ハ下二他

をしむ(惜,吝,愛)マ四他

をどす(威)サ四他

をどる(踊,躍,跳)ラ四自

をののく(戰)カ四自

をはる(終,了,畢)ラ四自

をふ(終,了,畢,卒)ハ下二他

をり(居,處)ラ變自

をる(折)ラ四他

をる(折)ラ下二自

ゆ

ゆく(行,往,之,逝)カ四自

ゆする(搖)ラ四他

ゆだぬ(委)サ下二他

ゆづる(讓,禪)ラ四他

ゆふ(結)ハ四他

ゆめむ(夢)マ上二他

ゆる(搖)ラ四他

ゆる(搖)ラ下二自

ゆるむ(搖)カ四自

ゆるりす(緩)サ變他

ゆるす(許,赦,宥,縱)サ九四他

ゆるぶ(弛,緩)ハ四自

ゆるぶ(弛,緩)ハ下二他

ゆるむ(弛,緩)マ四自

ゆるむ(弛,緩)ム下二他

よ

よぎる(過)ラ四自

よく(避)カ下二自

よどす(汚)サ四他

よこたはる(横)ラ四自

よこたふ(横)ハ下二他

よごる(汚)ラ下二自

よす(寄)サ下二自他

よそふ(裝)ハ四他

よそほふ(裝)ハ四他

よづ(攀)タ上二自

よどむ(淀,澱)マ四自

よむ(呼,喚)ハ四他

よぶ(讀,詠)マ四他

よみがへる(蘇)ラ四自

よる(由,因,依,倚,寄,據,凭)テ四自

よる(纏)ラ四他

よる(纏)ラ下二自

よろこぶ(喜,悅,欣)ハ四自

よわむ(弱)マ下二他

よわる(弱)ラ四自

わ

わかす(沸)サ四他

わかつ(分,別,頒)タ四他

わかる(理會)ラ四自

むかる(分,別)ラ下二自

おもし(重)一  
おもしろし(面白)一

か

かりばし(香,馨)二  
かとし(賢)一  
かしまし(驚)二  
かたし(固,確,堅,鞏)一  
かたし(難)一  
かたじけなし(辱,忝)一  
かなし(悲,哀)二  
かまびすし(喧,囂)二  
かゆし(痒)一  
からし(辛)一  
かろし(輕)一

き

きたなし(穢)一  
きびし(嚴)二  
きよし(清,潔)一

く

くさし(臭)一  
くすし(奇)二  
くはし(委,精)二  
くはし(美)二  
くぼし(凹)一  
くやし(悔)二  
くらし(暗,昧,昏)一

くろし(黒)一  
け

けはし(嶮,險)二

こ

ところよし(快,愉)一  
とし(濃)一  
このまし(好)二  
こはし(強,剛)一  
こまかし(細)一

さ

さかし(賢)二  
さかし(嶮,險)二  
さとし(聰)一  
さびし(淋)二  
さむし(寒)一  
さみし(淋)二  
さやけし 一  
さわがし(騒)二

さ

さげし(繁)一  
さたし(親)二  
さはし(吝)一  
さぶし(濫)一

す

すくなし(少,鮮,寡,眇)一  
すとし(少)二  
すとし(凄)一  
すし(酸)一

形容詞一覽

一はククシキケレ  
二はシクシクシ  
シキシケレ

あ

あかし(赤,赭)一  
あきらけし(明)一  
あさし(淺)一  
あし(惡)二  
あたらし(新)二  
あつし(厚,篤,敦)一  
あつし(暑,熱)一  
あはし(淡)一  
あまし(甘)一  
あまねし(普,遍)一  
あやし(怪)二  
あやふし(危)一  
あらし(荒,粗)一  
あをし(青,蒼)一

い

いさぎよし(屑,潔)一  
いそがし(忙)二  
いそがはし(忙)二  
いたし(痛)一  
いたはし(傷)二

いたまし(傷)二  
いちぢるし(著)二  
いとけなし(幼)一  
いとはし(厭)二  
いぶかし(訝)二  
いまはし(忌)二  
いみじ 二  
いやし(卑,賤,陋)二

う

うし(憂)一  
うすし(薄,菲)一  
うつくし(美)二  
うづたかし(堆)一  
うとし(疎)一  
うまし 一  
うやりやし(恭)二  
うるはし(麗)二

お

おそし(遅,晚)一  
おそろし(恐)二  
おなじ(同,全)二  
おびたなし(夥)二  
おほし(多)一

ふかし(深)一  
ふさはし(相應)二  
ふるし(古,舊,故)一

ほ

ほし(欲)二  
ほそし(細)一

ま

まさし(正)二  
まづし(貧)二  
まつたし(全,完)一

み

みじかし(短)一  
みにくし(醜)一

む

むつまし(睦)二  
むなし(空)二

め

めづらし(珍,奇)二

も

ものろし(慵,懶)一  
もろし(脆)一

や

やさし 二  
やすし(易,安,泰)一  
やはらかし(柔,和)一

やまし(病,疾)二

ゆ

ゆかし(床)二  
ゆるし(緩)一

よ

よし(善,良,好,能,美,佳)一

よろし(宜)二

よわし(弱,孱)一

わ

わかし(若)一  
わづらはし(煩,累)二  
わびし(侘)二  
わるし(悪)一

を

をかし(可笑)二  
をさなし(稚,幼)一  
をし(惜)二

すずし(涼)二  
するどし(鋭)一

せ

せはし(忙)二  
せぼし(狭,隘)一

た

たかし(高)一  
たくまし(逞)二  
たけし(猛)一  
ただし(正)二  
たのし(樂)二  
たのもし(頼)二  
たひらけし(平)二  
たふとし(貴,尊)一  
たやすし(容易,易)一

ち

ちかし(近,邇)一  
ちひさし(小)一

つ

つたなし(拙)一  
つめたし(冷)一  
つよし(強)一  
つらし 一

と

とし(疾,迅)一  
とし(利,銳)一

とほし(遠)一  
とぼし(乏,匱)二

な

ながし(長,永)一  
なげかはし(歎)二  
なし(無,莫)一  
なつかし 二  
なほし(直)一  
なまぐさし(腥)一

に

にがし(苦)一  
にぎはし(賑)二  
にくし(憎,惡)一  
にぶし(鈍)一

ぬ

ぬくし(温)一

は

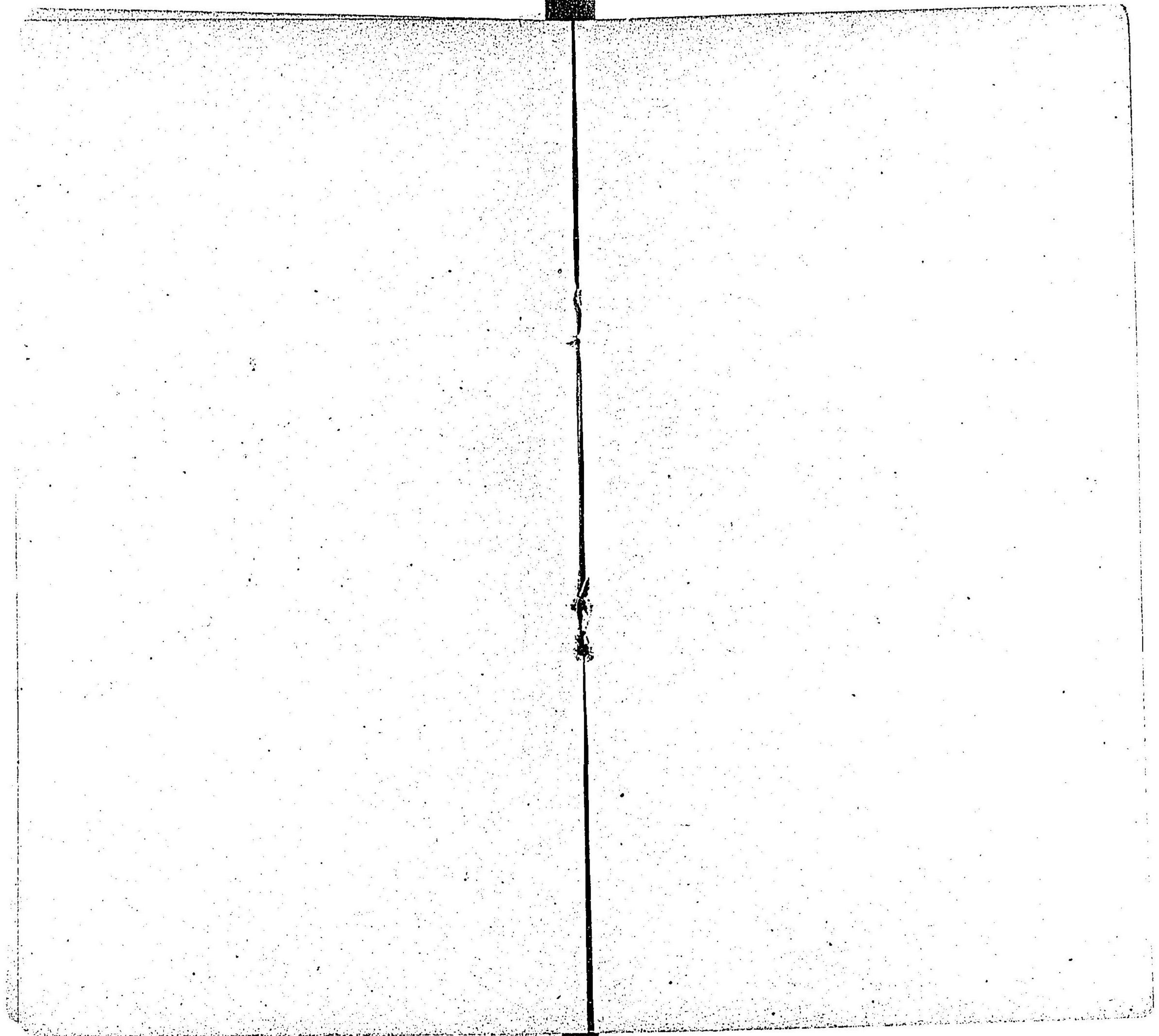
はげし(勵,激,劇)二  
はづかし(辱)二  
はやし(早,捷)一

ひ

ひくし(卑,低,下,矮)一  
ひさし(久)二  
ひとし(等,齊,均,鈞)二  
ひらたし(平)一

ふ

國  
文  
典  
終



明治卅八年十二月十五日發行

學生參考叢書

國文典 正價金拾參錢

著作者 三石 賤夫

東京市小石川區戸崎町四十六番地

發行者 大橋 省吾

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷者 石川 金太郎

東京市神田區表神保町三番地

發兌元 博文 武堂

發賣元 東京市日本橋區本町三丁目 博文 武堂

發賣元 東京市神田區表神保町 東京 文館

特約賣捌所 大阪 盛文館 吉岡平助 名古屋 川瀨代助

不許複製

# 學士叢考書

◎ 著名大家執筆 ◎

東 洋 史	外 國 地 理	地 文 學	鑛 物 學	漢 字 異 同 辨	國 文 典	日 本 地 理	植 物 學	代 數 學	物 理 學	物 理 學 前 後	物 理 學 前 後
成 功 の 鍵	動 物 學	微 分 積 分 學	三 角 術	幾 何 學	算 學	西 洋 年 表	西 洋 歷 史	日 本 年 表	日 本 歷 史	化 學	學 海 の 燈
◎	英 文	英 作 文	英 會 話	英 生 理 衛	英 教 授	英 教 育	英 倫 理	英 心 理	英 論 理	英 論 理	英 文 法
◎	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法	英 文 法

各册正價拾參錢郵稅貳錢宛

東京東洋館文庫

